古代アメリカ学会会報

第 39 号

ホンジュラス、コパン遺跡、大広場に立つステラ A（レプリカ）　©五木田まきは

目次

◆特集：研究者の道 II　1
◆自著紹介　5
◆第４回西日本部会研究懇談会の報告　6
◆国際シンポジウムの報告　7
◆学会協力事業のご案内　9
◆第 20 回役員会報告　9
◆第 20 回研究大会関連イベント報告　11
◆第 20 回研究大会報告　12
◆第 20 回総会報告　24
◆会員の受賞　30
◆事務局からのお知らせ　30
◆編集後記　31

2016 年 1 月

＊本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

特集：研究者の道 II

今回の特集は、2 人の会員に最新の研究状況を綴っていただきました。五木田会員は博物館を通じた教育・地域活性のための実践的研究、西澤会員は土器資料を通じた年代解釈研究となります。近年、本学会に入会されたお二人の研究を、幅広く共有していただく機会となればと思います。

●コパンにおける博物館活動

五木田まきは（金沢大学大学院人間社会環境研究科
博士後期課程 1 年）

コパン・ルイナス市はグアテマラ共和国との国境からほど近いホンジュラス共和国西部に位置し、古代マヤ文明を代表する遺跡の 1 つであるコパンを有する市である。市役所によると市の中心産業はコパン遺跡を中心とした観光である。市内には既に 3 つの博物館があるが、2015 年 12 月にはさらに日本のノン・プロジェクト無償資金協力を利用した、ヴァーチャル・リアリティ設備やハンズオン展示という特徴を持つコパン・デジタル・ミュージアムが開館する。この新博物館は、以前公立の小学校であった市の建物を改修し、運営は国立人類学歴史学研究所（以下、“研究所”と略記）が行っている。市役所と研究所の連携のシンボル的な存在として、既存の博物館とは異なりコパンのマヤ遺跡だけに焦点を当てるのではなく、19 世紀や 20 世紀の人々の写真や市役所所蔵の公文書といったコパン・ルイナス市の歴史を展示する。卒業生が今も多く市内に居住しているなど住民にとって親しみのある場所であるという点、遺跡公園だけでなく市の歴史にも焦点を当てているという点において、今後コア施設として遺跡と地域コミュニティとの調和的発展の架け橋となることが期待されている。その実践研究のために、筆者は 2015 年 9 月にコパン・ルイナス市で予備調査を行った。調査方法は、博物館職員、一般市民、学校教員を対象とした聞き取りである。

まず、市内 3 つの博物館職員に対して行った、自館の役割や活動実態の聞き取り調査について述べる。市内には設立順に、考古学博物館（中央広場に面し市庁舎に隣接）、石彫博物館（町の中心部から 1 キロほど離れた遺跡公園内）、そしてカサキニチ子ども博物館（中央広場から 5 区画ほど登った高台に位置：以下、“子ども博物館”と略記）がある。聞き取り調査の項目は、1）博物館固有のビジョンや役割、2）展示計画、3）その他の博物館活動の 3 点である。

聞き取り調査の結果、研究所が管轄する考古学博物館と石彫博物館の 2 つは、研究所の定めた全国共通のビジョンはあるものの、各館固有のビジョンや役割を定めていないことがわかった。石彫博物館の責任者は、個人的に館の役割やビジョンについての見解を持っており、展示についても同様に意見を持っているが、展示計画は首都の研究所職員が 1 人で取り仕切っているため、現場では容易に変更もできないと語った。また、3 番の質問に関連した学校との連携事業や、展示以外のプログラムについては、子ども博物館以外の 2 館は実施しておらず、子ども博物館も以前は学校招待事業を実施していたが、現在は行っていないという。つまり、コパン・ルイナス市の博物館の現状として、学校教育との連携体制が整っていないことが指摘できる。

しかし、住民への遺跡や博物館に関する実態調査は、こうした現状に相反する住民意識を示している。中央広場に訪れていた人を中心に、年代・性別が分散されるように便宜的に抽出した 10 代から 50 代までの男性 9 名女性 6 名計 15 名の地域住民を対象に行った調査では、1）コパン在住年数、2）遺跡への訪問経験・頻度、3）市内博物館の認知度、4）来館経験・頻度、来館・非来館の動機、5）新博物館の認知度・情報源、6）新博物館への関心、7）博物館に期待する機能の 7 項目について聞き取り調査を行った。この 7 番目の「博物館に期待する機能」の回答として最も多く挙げられたものが、学校教育との連携であった。次いで、入館料の値下げ、より興味の持てる展示内容、イベントの開催と続いている。つまり、住民側は博物館と学校との連携を望んでいるにもかかわらず、博物館側にそれを受け入れる体制が整っていない、ニーズを見逃している状況になっているのである。

その他の質問に関しては、15 名全員が在住年数に関係なくコパン遺跡への訪問経験があり、それに応じて遺跡公園内にある石彫博物館への訪問率が市内の 3 つの博物館のうち最も高かった。次いで中央広場に面する考古学博物館となり、中心地からやや遠い子ども博物館については訪問率・認知度共に他 2 館より低い傾向を示した。遺跡と博物館への来訪動機は、「歴史を学ぶため」が最も多く、遺跡の

場合は「自然を楽しむため」を挙げる住民が多かった。一方、非来館の動機としては、「忙しい」が最も多く、次いで「人が多い」、「展示内容が変わらないため全て見切ってしまった」となった。つまり、住民は歴史を学ぶための場として遺跡や博物館の存在意義を認知しており、実際に訪問もしている。しかし、日々の生活に追われゆっくり再訪しようという意識が薄いことも示している。これは、家庭を切り盛りする主婦の意見に多かったが、ここに住民が博物館と学校教育との連携を期待する背景がある。つまり、子どもに歴史や自然は学ばせたいが、自分は忙しくて連れていけないため、学校教育の一環として訪問させることを望むのである。

写真１　遺跡公園内に位置する石彫博物館（筆者撮影）

写真２　中央広場に面する考古学博物館（筆者撮影）

では、博物館との連携を期待されている学校側の意見はどうだろうか。滞在先の家族の協力を得て個人的に声をかけてもらい、図書館に集まった地元の公立小学校教員 4 名への聞き取り調査からその傾向を分析する。聞き取り内容は、１）学校教育の一環としての博物館利用経験の有無、その理由、２）博物館来館時の博物館側の対応、３）博物館訪問で期待する効果の 3 点である。結果としては、１）の博物館の利用経験については、遺跡訪問と連動して、遺跡内に併設する石彫博物館の利用度が最も高く、次いで子ども博物館となり、考古学博物館は挙がらなかった。考古学博物館と子ども博物館の利用経験が、一般住民のそれと逆転していることは、子ども博物館の特性が学校関係者に周知されていることを示している。

考古学博物館を利用しない理由は、「子ども向けに展示をわかりやすく解説してくれる博物館スタッフや子ども用の資料がない」、「博物館が小さく展示室が狭いため、1 クラス 30～40 人の児童を一度に連れて入ってしまうと、教員 1 人では管理できない」という回答が挙がった。これは、博物館側に対応できる職員や説明を行うガイドがいないという問題を示している。住民が期待している「学校教育の中での博物館利用」を実現するためには、狭い室内で大人数の子供に対応できる体制や、博物館の内容を説明してくれるスタッフ或いは学習ツールが必要であると言える。

今回の調査は試験的であり、対象者数が少なく十分な分析に値するとは言いがたいが、学校教育との連携不足といった既存博物館の課題や、住民が博物館に期待することなど、今後の新博物館の活動を考える上で有益な結果が得られた。今回の結果を受けて来年度は、特に学齢生徒を対象にした文化理解促進と博物館活動に関する実践研究を行いたい。地域住民の文化・歴史理解や、遺跡の保存・活用意識の促進・醸成が期待できる博物館と学校教育の連携は、文化遺産を活用した地域活性を実現するための重要なステップとなるだろう。

●コンチョパタ様式土器をめぐる新しい解釈

西澤秀行

はじめに

今から 10 数年前、私の恩師でもあるアニータ・クック博士が、ペルー中央高地アヤクチョ谷のコンチョパタ遺跡で発掘調査を実施した。この調査の結果、彼女はコンチョパタ様式の出現が、従来言われていたよりも新しいと結論づけた。コンチョパタ様式とは、ワリの土器でありながらいわゆるティワナクの図像で装飾されており、ティワナクの影響を考える上で重要視されてきた土器様式である(注1)。彼女の結論は具体的に以下の 3 点である。(1)コンチョ

パタ遺跡で近年発見されたワリ独自と思われる兵士やエリート、武器や盾などのモチーフが描かれた土器は、アヤクチョ谷でも最古（紀元 550 年～600 年）のものである。(2)一方でティワナク図像を持つコンチョパタ様式土器は、アヤクチョ谷で紀元 700 年以降に登場し、紀元 800 年以降に大きな重要性を担うようになった。(3)さらにティワナクの要素が強い、ティワナク遺跡の太陽の門を忠実に再現したモチーフがコンチョパタ遺跡で現れるのは、紀元 850 年以降のことである。

彼女のこの結論は、ドロシー・メンゼルが 1964 年に提起し、以後多くの研究者によって継承されてきた、コンチョパタ様式土器の登場と中期ホライズンの開始に関する解釈に真っ向から対立するものである。メンゼルは、「中期ホライズンにおける様式と時間」と題する論文で、ワリ土器の様式名を統一し、装飾・器形上の特徴を定義するとともに、それらの土器の地域的分布を考察した。さらに、こうした土器の様式変化や分布状況の変化を、ワリ国家の出現・発展・衰退についての時間的な変遷を映し出すものと解釈した。

私はこの記事で、コンチョパタ遺跡で新たに発見された土器に焦点を当てながら、これらの土器や従来から知られているコンチョパタ様式土器についての使用・変遷に関する異なる見解を示したい。

年代測定値とその解釈

まず、コンチョパタ様式の編年的な位置づけについて考察してみたい。冒頭で述べたように、クックはティワナク図像のモチーフを持つコンチョパタ土器が中期ホライズン 1 期（紀元 6～7 世紀）でなく、中期ホライズン 2 期（紀元 8 世紀）になってはじめてアヤクチョ谷に出現したとみる。さらにティワナク遺跡にある太陽の門をより忠実に再現したモチーフは、紀元 850 年以降になるまでコンチョパタの地に出現しなかったと主張する。従来のアヤクチョ編年体系に従うなら、紀元 850 年は中期ホライズン 3 期に相当することになる。

一方で 1997 年、ホセ・オチャトマとマルサ・カブレラは、コンチョパタ遺跡の D 字型をした建造物の床下で、大型甕の破片を大量に発見した。そのなかには、葦舟の上でひざまずく兵士の姿や、華麗な衣装を身にまとい直立したエリート階層の男性が表現されているものなど（以下ではこれらの図像を「新種のモチーフ」と呼ぶ）が含まれていた。このほか同じ建造物内で、巨大な人面を表現した壺の一部を発見したことも報告している。また、1999 年のウィリアム・イスベルとアニータ・クックによる同遺跡での発掘調査では、表面に 7 名の人物の横顔を描いた大型甕の破片が回収されており、イスベルはこれを歴代のコンチョパタ王を表現したものと解釈している。これらの新たに発見された土器には、コンチョパタ様式土器とは異なり、ティワナク図像やそれを想起させるようなモチーフが一切描かれていない。繰り返しになるが、クックはこれら新種のモチーフが、ティワナク図像よりはるか以前に登場したものであると考えている。

上述のクックによる新しい解釈は、19 の炭化物の放射性炭素年代の結果に基づいている。特にコンチョパタ様式の大型土器片の年代は、その中の 2 試料が根拠になっており、クックはそこから得られた紀元 780±60 年と 850±60 年という値を、コンチョパタの地にティワナク図像が到来した年代として解釈している。また新種のモチーフがティワナク図像を持つ土器よりも時間的に先行するという解釈は、紀元 530±90 年と 570±40 年という年代測定結果を根拠に導いている。これに従えば、ワリは宗教的に動機づけられた布教的な社会から、より世俗的で軍事的な国家へと時代とともに変容していったとする、これまでの解釈は根底から覆されることになる。すなわち、ワリはアヤクチョ谷で出現した当初から、きわめて軍事的で高度に政治組織化された性格を有していたということになるであろう。しかし、先行研究の蓄積からも、また他地域との整合性の観点からも、このような解釈を早急に結論づけるべきではないと私は考えている。

クックは、炭素年代測定によって得られた値をそのまま、これらの土器が製作、使用、廃棄された年代として捉えている。しかしコンチョパタ様式に関して言えば、この年代が必ずしもこの地にティワナク図像が到来した時期を示しているとも、この図像が土器の製作の過程で描かれた時期を示しているとも限らない。なぜなら、試料として使われた炭化物は、これらの土器片が見つかった同層埋土中から回収された焼け焦げた屋根構造物の一部と思われる残骸であったことや、ティワナク図像のアイデア到来後かなり時間がたってからこれらの土器が製作された可能性があること、また土器の製作と使用および廃棄の年代がずれる可能性があることなどによる。よって、コンチョパタ様式と関連した 2 試

料の炭素年代値は、ティワナク図像が到達した時期ではなく、コンチョパタ様式の土器が建造物内に堆積した時期を示している可能性が高いのではないかと私はみている。要するに紀元 850 年という値は、ティワナク図像のモチーフで飾られたこれらの土器片が地中に埋められた年代を示しているものと解釈できよう。同様に新種のモチーフは、紀元 530±90 年と 570±40 年より以前に製作されたということは推察できようが、これに関しても、必ずしもこれらの年代がそれらのモチーフがコンチョパタの地に登場した時期を示しているとも、またそれらが土器に描かれた時期を示しているとも限らないのではないだろうか。

コンチョパタ様式土器の使用と変遷

ここで私は、ティワナク図像のモチーフで装飾された大型土器が、コンチョパタの人びとによって先祖伝来の宝として大切に扱われていたがために、ほとんど使用されることがなかったという可能性を指摘したい。おそらく、この習慣はインカによって行われた祖先崇拝によく似ていたものと思われる。インカ帝国では国家の支配者や各地の有力者は死の時点でミイラにされ、特別な保管庫で大切に安置されていたことがよく知られている。同じように、ティワナク図像で装飾された大型土器も、コンチョパタ社会の、そしてやがてはワリ国家全体の先祖伝来の宝として大切に扱われるようになったのではないだろうか。クックは、コンチョパタ様式土器の表面には使用によってつくはずのキズがほとんど見られないことに言及しているが、上記の可能性を考えた場合、貴重品であるそうした土器はさほどキズがつくこともなく、何世紀にもわたり受け継がれたとしても不思議ではない。その上で、ある特別な儀式（たとえば、祭祀用建造物の封印のための儀式）のなかで、クックが主張してきたように生け贄のアナロジーとして壊され地中に埋められたということであれば、土器の製作年代と、その土器が壊されて考古学コンテクストの中に入っていった年代とのあいだに大きな時間差があって当然ということになる。現在のところ、ワリ国家の支配・影響が及んだ領域から報告されている他の遺跡の考古学調査の結果に照らして、このシナリオがもっとも矛盾なくクックが得た一連の絶対年代を説明しうると私は考えている。ワリ国家では紀元 800 年から 900 年頃にかけて、中心地アヤクチョ谷でも、また遠く離れた地方でも、多くの都市・集落でかなり大規模な再建事業が行われたことが、これまでの調査を通じて明らかとなっている。この期間に、コンチョパタでも大掛かりな再建事業が進められ、その一環として、それまで大切に受け継がれてきたティワナク図像を持つ大型土器が、古い建造物の封印のための儀式の中で壊され埋納されたということではないだろうか。

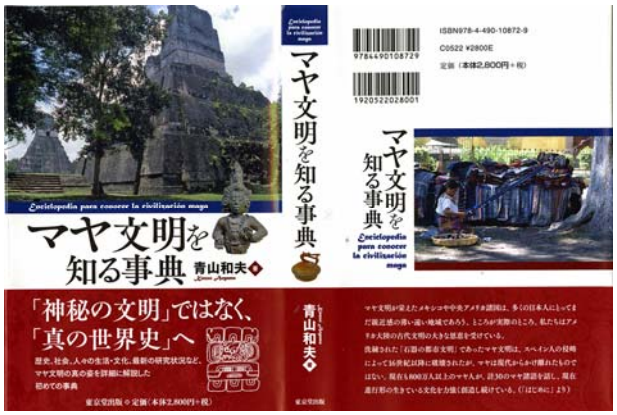
一方、新種のモチーフはティワナク図像の運命とは異なり、ロブレス・モコ様式と一般には分類される人型壺の方向に自らの進むべき道を見つけたのかもしれない。実際、新種のモチーフのなかには、ロブレス・モコ様式の壺に描かれた人物たちと、きわめてよく似た顔面装飾や衣装文様を呈する者もいる。中期ホライズンの初期（紀元 7 世紀）に、ティワナク図像と新種のモチーフとのあいだに何らかの機能上の違いが生まれた可能性や、新種のモチーフはティワナク図像とは使用の点で異なる歴史的運命をたどることになったという可能性も考えられる。すなわち、ティワナク図像と異なり、コンチョパタの土器職人は新種のモチーフを短期間だけ描き、その後すぐに使用を中止してしまったということはないだろうか。あるいは、こうしたモチーフで飾られた大型の土器はコンチョパタの人びとによって長期間保管されることなく、短期間の使用のあとに処分されてしまったということはないだろうか。いずれにしても、新種のモチーフが短命に終わった理由のひとつに、それらが宗教的・神話的性格を欠いていたということが考えられる。宗教的・神話的テーマを欠く大型土器は、儀式や宴会の席で提供される大量の料理を盛り付ける給仕用食器としての役割しか持っていなかったのかもしれない。そうであれば、これらの土器はコンチョパタの先祖伝来の宝として重宝されることもなく、世代を超えての継承が行われなかったとしても、何ら不思議ではないだろう。

(注 1) ティワナク図像は、正面を向いて直立した神らしき人物と、何人かの横向きの従者から構成されている。正面に立つ人物は四角い顔を持ち、多くの付属物が飛び出した頭飾りをつけている。その顔には 2 つの丸い目と開いた口が表現されている。チュニックを身にまとい、左右に伸ばした腕には職杖が握られている。一方、横向きの従者たちは、走っている姿、飛んでいる姿、そして動物の頭をしている姿といったいくつかの形で表現され

ており、各者とも頭飾りをつけ、やはりこちらも職杖を握った格好で描かれている。この図像は明らかに、ボリビアのティワナク遺跡の太陽の門や大型の石像レリーフを連想させるものである。

自著紹介

『マヤ文明を知る事典』青山和夫（東京堂、2015年11月刊、2800円＋税）



本書は、マヤ文明だけを過去から現在まで詳細に紹介した世界で初めての事典である。マヤ文明を含むメソアメリカ文明の事典については、これまでアメリカやイギリスにおいて英語で何冊か出版されている。2015 年 11 月現在、アメリカの出版社が『Encyclopedia of the Ancient Maya』を編集中である。こちらは、当然のことながら多数の執筆者が分担執筆しており、実は私も項目を執筆している。『マヤ文明を知る事典』を 1 人で執筆するのは、実に大きな挑戦であった。

マヤ文明の調査研究は急速に発展し続けている。人々の暮らしが具体的に明らかにされ、マヤ文字の解読によって石碑などに刻まれた王朝史が詳細に解明されている。しかし、学術研究の成果は、社会一般になかなか浸透せず、その実像はまだあまり知られていない。私は、「学術研究と社会一般の理解の距離を縮めたい」という強い願いを込めて『マヤ文明を知る事典』を書いた。本書は、私の記念すべき 20 冊目の本である

第 1 部「マヤ文明とは何か？」では、まず謎と神秘の文明ではないマヤの実像を、あらかじめプロローグ的に示す。第 2 部「解き明かされたマヤ文明の実像」では、大きく 3 つのトピックで見出しを立てて説明する。第 1 章「マヤ文明の地理・歴史」は、地理と環境、交通・交易、暦・算術・天文学、文字、歴史についてである。第 2 章「古代マヤ社会」では、諸王朝と都市、戦争、建築、日常生活と家族、儀式・行事、世界観・神話・宗教、美術・工芸、生業と作物・食料について解説する。第 3 章「現代に生きるマヤ」では、現代に生きるマヤの人々、「発見された」マヤ文明とマヤ考古学、日本人とマヤ文明について述べる。私がマヤ文明を勉強し始めた 30 年前の 1985 年には、こうした体系的な知識を得る日本語の本は皆無といっていいほどなかった。

本書では、私のホンジュラスの世界遺産コパン遺跡と近隣のラ・エントラーダ地域の調査（1986～1995 年）、グアテマラのアグアテカ遺跡（1998～2007 年）とセイバル遺跡（2005 年～）の調査の成果をちりばめながら、これまで執筆してきた日本語、英語、スペイン語の本や論文の内容に最新の情報を加えると共に、新たな原稿を書き下ろした。2015 年に 50 周年を迎えた青年海外協力隊の経験（1986～1992 年）や私が代表を務める科研費新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（平成 26～30 年度、http://dendro.naruto-u.ac.jp/csaac/）の成果もふんだんに盛り込んである。本文の全ページに写真や図版をもれなく掲載したのが、本書の大きな特徴といえる。他の方が撮影された数枚以外の全ての写真は、私が撮影したものである。良く見ると妻ビルマ、ホンジュラス生まれの長女さくらとアメリカ生まれの二女美智子がマヤ文明の諸遺跡の片隅に時おり登場する。

さてグアテマラのセイバル遺跡で働くケクチ・マヤ人の敏腕発掘作業員のフアン・チョクさんは、自分の息子になんと私と同じ「カズオ」という名前を付けた。「カズオ」はケクチ語でとても美しい響きがある名前だそうで、奥さんと相談して決めたという。2015 年 3 月に、フアンさんは、奥さん、3 歳になるカズオ君、生まれたばかりの娘さんと一緒にセイバル遺跡の近くのホテルに宿泊中の私を訪ねてきてくれた。以前からカズオ君と奥さんが、是非とも私に会いたいと強く希望していたからだという。「あとがき」の最後のページには、カズオ君ら 4 人と一緒に撮影した写真を掲載した。「マヤは現在進行形の生きている文化」だと、改めて強く感じた瞬間であった。

青山和夫（茨城大学人文学部教授）

第４回西日本部会研究懇談会『次世代研究者によるマヤ研究』

2015年6月27日（土）に、第４回西日本部会研究懇談会が京都府京都文化博物館で開催された。参加者は20名であった。

今回の研究懇談会では「次世代研究者によるマヤ研究」と題して、お二人の大学院生に発表していただいた。本会の目的の一つに若手研究者の養成がある。二人とも金沢大学大学院に所属し、なかでも大学院生の中から選抜された文化資源マネージャー養成プログラムの学生として、国際的なフィールドで活躍が期待されている。このプログラムはユニークで、普段は英語で授業を受け、演習発表をおこなう。修士論文も英語で執筆されたそうだ。今回はその修士論文をもとにご発表いただいたが、すでに修士論文の域を大きく超えているとの評価が参加者からあがっていた。

発表のお一人目は、五木田まきは会員で、題目は「マヤ地域における「パトリ」の文化資源化」であった。「パトリ」はメソアメリカのゲームの一種である。そのゲーム板を表したとみられるグラフティが、先スペイン時代の建造物にまれに遺されている。「パトリ」の記録は植民地時代、そして現代でもみられると言う。このように長期・広域に存在するという特徴がありながら、ほとんど注目されていない。そのため、保存されないことすらあるようだ。そこで五木田会員は、マヤ地域のパトリ・グラフティを実地調査により現状把握をおこなった上で、課題の打開策として、パトリの重要性や魅力を、博物館展示を通じて普及していくという具体的提案をおこなった。このような文化遺産にかかわる研究あるいはパブリック考古学的研究は、ややもすれば現状批判に終始する研究がある中で、自らが実現可能な実践にまで具体的に結びつけていることは、本発表の特徴であった。そのため、具体的な提案には、具体的な批判や示唆がコメンテーターから与えられた。馬瀬智光会員（京都市文化市民局文化財保護課係長）からは法規の運用や文化財管理における現場レベルで解決すべき、あるいは注目すべき課題について、南博史会員（京都外国語大学教授）からは展示構成やハンズオン展示の改善案が提起された。

お二人目の発表者は福井理恵会員で、題目は「マヤ地域南東部における黒曜石交易 -蛍光X線分析による原産地推定-」であった。黒曜石を素材とした交易ないし地域間交流の研究は、マヤ地域の研究で盛んにおこなわれている。その中で、福井会員の発表の特徴は、自ら試料の理化学分析をおこない、それによって従来の研究を補完または検討することにあった。福井会員は、グアテマラとホンジュラスの黒曜石原産地を踏査・試料採集をおこない、ホンジュラスの遺跡出土の遺物960点と化学組成を比較した。結果として、これまでの肉眼観察による分析結果の確かさを追認する一方で、肉眼観察結果と理化学分析結果が一致しない遺跡もあることを明らかにした。こうしたデータをもとに、南東マヤ地域の黒曜石の流通は従来考えられていたよりも複雑であるという説を導いた。コメンテーターには、同じく黒曜石の流通に関する研究を南米で実践されている松本雄一会員（山形大学准教授）をお招きした。松本会員からは、分析結果の評価あるいは解釈について、具体的なモデルや理論を提示したコメントがあった。従来のデータと異なるデータは、いつでもさらなる研究の進展の源と思われるが、一方で慎重な検討も必要となる。様々な観点からの質問とコメントが多くあり、盛んな議論がおこなわれた。

さて、今回の研究懇談会における運営上の工夫は、若手研究者に当会会員との十分な議論の時間を提供したこと、それから中米研究者（発表者）と南米研究者（コメンテーター）という組み合わせ、いわば研究者の南北交流の機会を提供したことである。今後は、研究者間の交流をさらに押し進め、発表者と似た分野を研究している日本考古学の専門家など、他地域の研究者を積極的にお招きするような工夫も視野に入れていきたい。

（西日本部会幹事：村野正景）

●公開講演会

「エルサルバドルや中米における移民」

福原弘識（埼玉大学ほか非常勤講師）

(写真提供：伊藤伸幸)

2015 年 10 月 6 日（火）、セルバンテス文化センター東京地下 1 階オーディトリアムにて、公開講演会「エルサルバドルや中米における移民」が開かれた。主催が国際交流基金、共催はセルバンテス文化センター東京、協力は文化遺産国際協力コンソーシアムと古代アメリカ学会であった。

まず、ラモン・リバス氏（エルサルバドル共和国文化庁長官）より、エルサルバドルや中米の移民問題について講演があり、その後、落合一泰氏（明星大学）のコメントがおこなわれた。司会は伊藤伸幸本学会員（名古屋大学）が務めた。

文化人類学者であるリバス氏は、国境を行き来する人々が持ち込む新たな文化や価値観によって、地域社会の伝統が大きく変化しつつあると指摘した。リバス氏によれば、20 世紀前半からエルサルバドルは世界各地に移民を出し、なかでも 1980－1992 年まで続いた内戦期に最も多くの難民や移民が国外へ出た。特に現在の米国におけるエルサルバドル出身者の数は、移民者中で四番目の多さとなっており、現エルサルバドル経済も移民たちの送金に多くを依存しているという。講演では、国境を行き来する移民者たちが外国生活になじみ、エルサルバドル人としての伝統的な生活を忘失しつつあることや、祖国へ帰国した人々と地域社会との間で様々な軋轢が生じている実情が紹介された。リバス氏は、越境者が持ち込む多様性や変化を拒否するのでなく、それを受容するメカニズムを構築し、トランスナショナルな価値観を共有することの必要性を訴えた。

講演会の参加者は約 45 名で、講演後に行われたレセプションにおいても質問やコメントが盛んに交わされ、大変盛況であった。

●公開講演会

「エルサルバドルの文化遺産と国際協力」

市川　彰（名古屋大学）

(写真提供：伊藤伸幸)

2015 年 10 月 7 日（水）、名古屋大学文系総合館 7 階カンファレンスホールにて、公開講演会「エルサルバドルの文化遺産と国際協力」が開催された。本公開講演会の主催は、国際交流基金であり、共催として名古屋大学文学研究科付属人類文化遺産テクスト学研究センター、協力が文化遺産国際協力コンソーシアム、そして古代アメリカ学会であった。

講演者は、エルサルバドル共和国文化庁長官を務めるラモン・リバス氏である。まず発表の冒頭で、政治家でもあり、文化人類学者でもあるリバス氏は、「文化」の重要性を説き、文化遺産の保護と活用は社会をより良くするためのひとつの軸である、と主張した。

次に、エルサルバドルにおける考古学調査史について、代表的な外国人研究者の業績を振り返りながら概観したうえで、エルサルバドル人考古学者誕生への軌跡を紹介した。このエルサルバドル人考古学者誕生に尽力したのが、京都外国語大学・大井邦明先生をはじめとする日本の調査団であった。1995 年から 2000 年まで続いたチャルチュアパ遺跡カサ・ブランカ地区での考古学調査でトレーニングを受けた 5 名のエルサルバドル人が考古学者となったことを、懐かしい写真とともに紹介した。つづいて、2000 年代の重要な国際協力の一例として、チャルチュアパ遺跡における名古屋大学や青年海外協力隊の一連の活動成果を述べられた。最後に、エルサルバドル技術大学の人類学・考古学専攻生が主催する学

生フォーラムや 2006 年から開催されている中米考古学会議など、エルサルバドル国内において考古学に関する活動が、ますます活発になってきていることをリバス氏は熱弁した。

学内の至るところに宣伝用ポスターを早くから掲示したことが功を奏し、当日の参加者は平日の昼間にもかかわらず、30 名に上ったことは会場を準備したものとしては大変嬉しかった。さらに名古屋大学や南山大学の考古学や文化遺産関係者だけではなく、国際協力に関心のある学生、ペルー人など、さまざまな関心をもつ人々の参加があり、質疑応答が活発に行われた。若い学生からの質問に親身に答えるリバス氏がとても印象的であった。

●研究講座

「エルサルバドルにおける文化政策の現状と課題」

村野正景（京都文化博物館）

(写真提供：京都外国語大学)

2015 年 10 月 10 日（土）、京都外国語大学 1 号館 7 階 171 教室にて「第 15 回ラテンアメリカ研究講座/国際文化資料館第 2 回研究講座　中米における地域開発の現状と課題」が開催された。この講座の第 2 部「エルサルバドル共和国チャルチュアパ遺跡で日本が果たした役割と今後～京都外大と青年海外協力隊の活動を振り返って～」では、ラモン・リバス博士（エルサルバドル共和国文化庁長官）をお迎えして、「エルサルバドルにおける文化政策の現状と課題」と題するご講演をいただいた。この記念講演は、国際交流基金と京都外国語大学の招聘に実現した。主催は同大学京都ラテンアメリカ研究所、国際文化資料館で、本会が後援した。

リバス長官は、文化人類学者として中米各地のインディヘナの文化や現状の調査をおこない、文化振興や社会開発のあり方を論及しておられる。その一方、エルサルバドル技術大学附属人類学博物館の館長として古代から現代に至る多様な歴史を文化アイデンティティの観点から展示・公開されている。

本講演では、研究者としての経験をふまえつつ、現在の政治家としての立場から、同国の文化遺産行政についてお話しいただいた。冒頭で文化や文化遺産の概念を検討され、それが非常に幅広い意味を含み、帰属意識や人間関係、経済、社会開発などにかかわる重要な要素である指摘された。その上で、現状、文化遺産を保護する法や規則、制度などの整備・充実を図っている段階であることを、1000 以上あると推測される文化遺産をまだ国立公園として 9 カ所だけしか管理できていないことや、法に罰則規定が明確になっていないことなどの例をあげつつ、説明された。また、日本やその他諸外国には別の道筋があると断った上で、エルサルバドルでは法整備に加えて、「教育」によって文化遺産の重要性を国民に示していくことが何より大事であるとされた。新たな動きとして、文化遺産よりも上位の概念である、文化に関する法を制定しようとしていることや、CELAC（ラテンアメリカ・カリブ諸国共同体）の各国長官級会議で、政治戦略として「文化」を横断的な軸とすることを提案し、2015-2020 の行動計画に盛り込まれたことなどを報告いただいた。最後に、研究者は文化遺産の問題に無関心でいてはならず、歴史的価値を見出し、解釈し、その保存と活用の道を模索するべきだと主張された。なぜなら政治家はそうした研究者の調査成果や主張に応じて活動するからで、いま世界でそれが求められているとまとめられた。

講演後の質疑応答では、同国ではメディアや政治を学ぶ学生に比べるとまだまだ考古学を志望する学生が少ないことや、政治家であり研究者であるという立場がときに言動を制約していることなどを語られた。また長官から会場の学生へ、なぜ考古学を勉強しようと思ったのか、日本の学生の動機を知りたいという質問が投げかけられる場面もあった。

ご講演に続いて、4 本の発表とフォーラムがおこなわれた。同国チャルチュアパ遺跡群では、京都外国語大学の事業の一端を引き継ぐ形で、青年海外協力隊が活動した。そこで、事業立案当時から関与していた南博史氏（京都外国語大学）、協力隊 OB として市川彰氏（名古屋大学）と村野、協力隊派遣側である JICA から木村聡氏が登壇し、これまでの成果と課題、将来についてかなり具体的な踏み込んだ発言と議論がおこなわれた。会場からの質問も多く、充実した研究講座となった。

本学会協力事業のご案内

●企画展「ナスカの地上絵～山形大学人文学部附属ナスカ研究所の成果から～」

開催期日：2016 年 2 月 14 日（日）～3 月 13 日（日）
※休館日　2 月 15 日（月）・3 月 7 日(月)
時間：午前 9 時～午後 4 時 30 分
開催場所：山形県郷土館「文翔館」
（〒990-0047　山形市旅篭町 3 丁目 4 番 51 号）

講演会
①平成 28 年 2 月 14 日(日)13 時 30 分～15 時
渡邊洋一（山形大学教授）「認知心理学からみたナスカの地上絵」

②平成 28 年 3 月 6 日(日)10 時 00 分～12 時 00 分
坂井正人（山形大学教授）「最近のナスカ研究の動向」
ケヴィン・ボーン（Kevin Vaughn）（カリフォルニア大学）「ペルー南海岸ナスカおよびイカ地方の考古学的秘宝」(Archaeological Treasures of Nasca and Ica, South Coast of Peru）日本語通訳あり

会場：文翔館議場ホール
趣旨：ペルー共和国イカ県ナスカ市のナスカ台地において、山形大学人文学部附属ナスカ研究所が実施している地上絵およびナスカ社会に関する研究内容および成果を紹介する。
主催：(公財)山形県生涯学習文化財団、山形大学人文学部附属ナスカ研究所
後援：在日ペルー大使館
協力：古代アメリカ学会、日本学術振興会科学研究費補助金「古代アメリカの比較文明論」（代表　青山和夫）凸版印刷株式会社、山形大学附属博物館
入場無料

2015 年度　役員会報告

2015 年度　第 10 期第一回役員会議事録抜粋

日時：2015 年 12 月 4 日（金）17:30－20:50
場所：ミューズホール(東京大学総合研究博物館 7 F)
出席者：関雄二、伊藤伸幸、渡部森哉、福原弘識、中川渚、大平秀一、土井正樹、松本雄一、坂井正人
議長：坂井正人、書記：福原弘識

１．前回役員会議事録について
2014 年 12 月 6 日（土）に開催された、2014 年度第 9 期第一回役員会の議事録の確認が行われた。

２．メール役員会の議決内容について
2015 年度のメール役員会における議決事項 16 項目について確認が行われた。

３．メール役員会報告事項について
2014 年度のメール役員会における報告事項 5 項目について確認が行われた。

・審議事項
１．2015 年度各委員会事業報告（**総会報告・審議事項２参照**）
各事業担当運営委員の報告に対する審議を経て 2015 年度事業報告は了承され、この通り総会に報告し承認を求めることとなった。

２．2014 年度決算ならびに監査報告**【総会資料１参照】**（監査委員：伊藤伸幸）
2015 年 1 月に収支決算と監査をおこなったことが報告され了承された。会則 22 条による総会での承認は、総会で求めることが確認された。

３．2014 年度決算概報【総会資料２参照】（会計担当運営委員：土井正樹、代表幹事：坂井正人）
土井会計担当運営委員により、2015 年度決算概報（2015 年 12 月 4 日時点の確定収入・支出と残余期間の収入・支出見込み）が報告された。坂井正人代表幹事より会報・名簿印刷費に関し過払い金があったことなど、個別の項目について補足説明がなされた。意見交換を経て、この通り総会に報告されることが了承された。

４．2016 年度事業計画案ならびに予算案について（**総会報告・審議事項４参照**）

各事業担当運営委員から説明された事業計画案に対する審議を経て2016年度事業計画案は了承され、この通り総会で説明し承認を求めることとなった。

また、土井正樹会計担当運営委員より予算案が示され､坂井正人代表幹事により補足説明がなされた。審議を経て了承され、この通り総会に諮ることが了承された。

５．除名対象会員の扱いについて

会則 11 条の改定が総会で承認された場合、対象者の除名については役員会で審議し、同会則の改定が総会で承認されなかった場合、除名については総会に諮るものとすることが提案され、了承された。

６．第21回（2016年）研究大会開催日と会場について

第 21 回研究大会を、2016 年 12 月 3 日（土）・4 日（日）に茨城大学で開催することが提案され、了承された。

７．第21回（2016年）研究大会実行委員会について

第 21 回研究大会の実行委員会について、委員長を青山和夫会員、委員を研究運営担当委員の渡部森哉会員と代表幹事の坂井正人会員として組織すること、また委員長の判断により他の委員が委嘱される場合があることが承認された。

８．会則の改訂について**（総会報告・審議事項５参照）**

８－１．会則第 11 条（除名）について

除名会員の再入会希望があり、これに関する事項を役員会の申し合わせ事項に追加したことに伴い、会則第 11 条を改定する提案を総会に諮ることが了承された。

８－２．会則第 12 条（役員）について

事務局の作業煩雑化に伴い、運営委員の定員を変更（増加）する会則第 12 条の改定案を総会に諮ることが了承された。

９．総会の議題について

総会の議題について坂井正人代表幹事より提案があり、承認された。

10．その他

（1）発表証明書の発行について

第 20 回大会以降、会員から申請があった場合、研究大会の発表証明書の発行について対応することが提案された。証明書の様式などは、決定次第メールなどの媒体を通じて会員に報告することが提案され、了承された。

（2）学会の名義（協力）使用申請について

企画展「ナスカの地上絵～山形大学人文学部付属ナスカ研究所の成果から～」および講演会に対する学会の名義（協力）使用申請について審議され、了承された。

（3）抜き刷り PDF

会誌第 19 号以降、論文執筆者に無料で配布されていた抜き刷り印刷 30 部を廃止し、抜き刷りの配布は PDF ファイルのみとすることが審議され、了承された。なお、希望者に対する有料抜き刷り印刷は引き続き行われる。

・報告事項

１．第 20 回研究大会について（第 20 回研究大会実行委員長：鶴見英成）

第 20 回研究大会実行委員会で作成した大会ロゴを使用することが報告された。

２．事務局からの報告（事務幹事：松本雄一）

(1)会員について

2015 年 12 月 4 日現在の会員総数は 156 名、うち 31 名が学生会員、新入会員 7 名、退会者 4 名であることが報告されたまた、連絡先不明会員、会費未納会員についての報告があった。

・連絡事項

松本雄一事務幹事より、大会・総会情報をウェブサイト上に 7 月上旬に掲載予定であったが、10 月 6 日になってしまったことのお詫びと報告がなされた。

以上をもって、2015 年度第 1 回第 10 期役員会は予定していたすべての議事の審議を終了した。

第 20 回研究大会関連イベント、モバイルミュージアムと AMS 見学会の報告

東京大学で16年ぶりに研究大会をお引き受けするにあたり、本学の持ち合わせる資源を活用して、第20 回の記念となるようなイベントを開催したいと考えた。実行委員会としても今回はアニバーサリーイヤーだという認識があり、提案を承認して下さった。共催機関として東京大学総合研究博物館の協力を得て、以下のような展覧会と施設見学会を実施した。

モバイルミュージアム「東大アンデス考古学のかたち」展は、会場入口にパーティションと移動式什器で展示空間を作り、12 月 5 日・6 日の両日にわたり公開した。1958 年に始まる東京大学の調査は古代アメリカ研究史上いくつかの画期的な成果を挙げたが、それを物語る学術標本群が総合研究博物館に所蔵されている。とくに貴重な資料として、コトシュ遺跡で発見された壁面レリーフ「交差した手」から直接起こした石膏製の型や、発見の日の調査日誌などが展示された。クントゥル・ワシ遺跡で出土したアメリカ最古の黄金製品群のレプリカ、北部ペルーの形成期土器編年の確立に大きく貢献した計 5 遺跡の土器片なども公開した。また本学による直近のコトシュ遺跡再調査についてもパネルで紹介させていただいた。なお展示品の一部は 2016 年中に総合研究博物館の常設展にて再度公開する予定である。

コンパクト AMS 見学会は 12 月 6 日の昼休みに実施された。総合研究博物館放射性炭素年代測定室は最新式の年代測定装置であるコンパクト AMS（加速器質量分析装置）を導入し、2015 年に館 1 階の常設展スペースに設置して、AMS 公開ラボをオープンした。コンパクトと銘打たれてはいるがかなりの威容を持ち、高精度であることはもちろん、展示物としての美しさも追求して設計されている。2016 年内に研究現場展示「クロノスフィア」として一般公開され、ガラス越しに見学できるようになるが、今回の見学会ではラボ内部に参加者をお通しし、装置を間近に見ていただくことになった。年代測定室教授の米田穣会員、同室特任研究員の尾嵜大真氏・大森貴之氏が装置の構造と測定の原理を解説し、参加者からの質問を受け付けた。研究大会参加者のうちかなりの方が、昼食をとる前後の時間を使って見学されたようである。とくに考古学を専門とする会員は、年代測定のラボに測定を依頼することはあっても、現場に立ち入ったのは初めてという声がほとんどであり、活発な質疑応答が続いた。

東京大学総合研究博物館は標本・資材・経費を提供したが、当日の設営・撤収作業は何人もの会員がお手伝いくださった。改めてお礼申し上げたい。

（第20回研究大会実行委員長：鶴見英成）

モバイルミュージアム会場のようす

コンパクトAMSと見学会のようす

第 20 回研究大会報告

本学会第 20 回研究大会（主催：古代アメリカ学会、共催：東京大学総合研究博物館）は 2015 年 12 月 5 日（土）、6 日（日）に東京大学で開催され、学会員 52 名、一般参加者 15 名、計 67 名の参加があった。調査速報が 16 本、研究発表が 6 本発表された。発表の詳細は以下のとおりである。

調査速報（12 月 5 日 13：00 - 15：30）

13:00 - 13:20

「ペルー南海岸・インヘニオ谷における考古学調査」

山本睦　（山形大学）
松本雄一（山形大学）
坂井正人（山形大学）
ホルヘ・オラーノ（山形大学）
ヨシミツ・ホイヨ（山形大学ナスカ調査団）

山形大学の調査チームは 2013 年より、ペルー南海岸のインヘニオ河谷において集中的な考古学調査をおこなっている。本発表ではインヘニオ谷におけるここまでの成果を総括し、今後の展望を提示した。

インヘニオ谷の上・中流域で行われた一般調査によって、形成期後期に対応するパラカス中期（紀元前 500-400 年）から後期中間期に対応するイカ期（紀元後 1000-1400 年）にいたるまでのセトルメント・パターンのデータがえられた。その結果、ナスカ期（紀元前 100-紀元後 600 年）にとくに重要な変化が起こったという見通しがえられた。パラカス中期から増加を続けた遺跡数はナスカ前期にその頂点に達し、中期から後期にかけて急激に減少しているのである。このようなセトルメント・パターンの変化とナスカ社会における社会変化がどのように関わっていたのか。この点を考察するため、インヘニオ谷における最も重要なナスカ期の遺跡、ベンティーヤ遺跡の調査が実施された。

地上絵によって知られているナスカ社会であるが、その地上絵が集中的に分布するナスカ台地をはさんで、ナスカ谷のカワチとインヘニオ谷のベンティーヤという大遺跡が位置している。カワチに関しては、長期にわたる発掘調査と土器分析の成果にもとづいて、パラカス期からナスカ期（紀元前 500-紀元後 500 年）における中心的な祭祀・巡礼センターであったと考えられている。その一方、ベンティーヤ遺跡でこれまでに実施されたのは踏査のみであり、その実態はいまだ謎に包まれている。しかし、その例外的な規模、カワチとの配置関係を考えるとナスカ社会において極めて重要な遺跡であったことは明白である。2014～2015 年の現地調査では、ベンティーヤ遺跡の各建造物の機能や関係性、編年的位置づけの同定に焦点が当てられた。

13:20 - 13:40

「ビスカパルカ地域とワンカ・ハサ遺跡における調査」

土井正樹（日本学術振興会特別研究員 PD,山形大学）
マリルー・マルティネス・ゴメス（トリゴパンパ村考古学調査プロジェクト共同責任者）

ペルー中央高地南部のアヤクーチョ谷は、ペルーを中心とする中央アンデス地域の編年において中期ホライズンと呼ばれる時期にワリ国家が成立した地域として知られている。ワリ国家に特徴的な建築や土器は、ペルー山岳部を中心に広く分布している。これまでのワリ国家に関する研究は、そのようなワリ国家に関連する建築や土器の広がりが、ワリ国家の帝国性を示しているのか否かを明らかにすることを目的とするものが中心であり、ワリ国家の成立過程の解明を目的とする研究は少ない。

発表者は、ワリ国家の形成から崩壊にいたるまでの過程の解明を目的とし、2002 年と 2003 年にアヤクーチョ谷に位置する、トリゴパンパ村に存在する 3 遺跡、ワンカ・ハサ遺跡、タンタ・オルホ遺跡、クルス・パタ遺跡において発掘調査を実施した。その結果、ワンカ・ハサ遺跡からは、ワリ国家の成立直前期に相当する時期に、アヤクーチョ谷のワル

パ社会とペルー南海岸のナスカ社会との間の交流が活発化したことを示唆する資料が得られた。かつては、ワリ国家形成のきっかけとしてティティカカ湖南東岸を中心とするティワナク社会からアヤクーチョ谷社会への影響が重視されてきたが、最近では、ワリ国家形成の要因としてワルパ社会とナスカ社会の交流の重要性が認識されつつある。

このワルパ社会とナスカ社会との交流のあり方の解明の鍵となると考えているのが、ワンカベリカ州のチュパ-ビスカパルカ遺跡とアヤクーチョ谷のワンカ・ハサ遺跡である。チュパ-ビスカパルカ遺跡は、アヤクーチョ谷と南海岸のほぼ中間の標高約3370m のビスカパルカ地域に位置し、ここからはナスカ文化の土器が出土している。ナスカ文化の土器が出土している遺跡としては最も標高が高く、さらにアヤクーチョ谷と南海岸のほぼ中間という地理的位置から、ワルパ社会とナスカ社会の交流の様子を解明するには適した遺跡であると考えられる。一方、ワンカ・ハサ遺跡からは、ナスカ文化の土器との関係を示すワルパ文化の土器が出土している。本発表では、ビスカパルカ地域において実施した踏査と、ワンカ・ハサ遺跡において実施した発掘調査の成果について報告した。

13:40 - 14:00

「ペルー北海岸・北部中央海岸沿岸部における遺跡の広域踏査：遺跡立地と漁撈、神殿建築」

荘司一歩（総合研究大学院大学博士後期課程）

本発表では、ペルー北海岸および北部中央海岸沿岸部でおこなった広域踏査の結果を提示し、形成期における遺跡立地と魚類利用の地域差を考察した。これまでのアンデス形成期研究は、アンデス山脈から太平洋にそそぐ、河川流域を単位として行われる傾向にあった。そのため、標高にともなう東西方向の環境や資源の差異および遺跡間交流に関して、研究蓄積が厚い。一方で南北方向の地域差に関して焦点を当てた研究は決して多くない。とくに、沿岸部の遺跡は、南北に広がって分布するにも関わらず、海産 資源の利用や物質文化の地域差について焦点が当てられてこなかった。

こうした問題意識のもと、2014 年と 2015 年にペルー北海岸および北部中央海岸沿岸部 に位置する形成期遺跡の踏査を行った。その結果、ラ・リベルタ州とアンカシュ州の境界に 位置するサンタ川をはさんだ南北で、遺跡の立地に差異が認められることが明らかになった。具体的に述べれば、サンタ川以北では、標高 10m~20m 程度の低い海岸段丘に遺跡が立地するのに対し、サンタ川以南では、標高 20m~40m 程度の海岸線にせり出した小高い山の裾野に立地する。

加えて発表者はこの遺跡立地の差異を検証するため、各遺跡から出土した魚骨資料のデータを収集し、概観した。その結果、これまで注目されてきたカタクチイワシの優先的な利 用を示す遺跡に加えて、サメ類を優先的に利用する遺跡が一定数存在し、両者はサンタ川をはさんで一定の地理的まとまりを持って分布していることがわかった。

このように、漁撈と遺跡立地の点からみて、サンタ川の南北では地域的な差異がみられる。さらに、これらの地域的な差異は、各遺跡にみられる物質文化や遺跡間交流のあり方と密接 であった可能性がある。なぜなら両地域には基壇を伴うような神殿建築の出現過程に差異 が認められるためである。

以上のように本発表では、遺跡立地、魚類利用、神殿建築の点から、サンタ川をはさんだ 南北の海岸地域における形成期の地域差を考察した。

14:00 - 14:20

「海岸カハマルカと呼ばれる土器群について−中期ホライズン期中央アンデスの社会動態−」

渡部森哉（南山大学）

アンデス考古学において「海岸カハマルカ」と通称されてきた土器群がある。オレンジ色の胎土で内面と外面口縁部を白く塗り、内面にオレンジ色で彩紋した、低い高台付きの碗形土器である。器形と文様の特徴がカハマルカ盆地を中心に分布するカハマルカ様式の土器と類似しているが、主に海岸地帯で見つかるため、海岸カハマルカと呼ばれてきた。この土器の製作が始まったのは中期ホライズン期であり、カハマルカ盆地の土器編年ではカハマルカ中期 B に対応する。本発表ではこの土器群を手がかりに中期ホライズン期（後 700-1000 年）に生じた社会動態について考察した。

一般に土器は編年の基礎となり、また相互交流域を推定する手がかりとなる。ある特定の土器がその中心地から離れた場所で出土する場合、搬入品、あるいは影響を受けて製作されたと解釈される場合が多い。一方、アンデス考古学ではしばしば特定の

民族集団と特定の土器様式が結びつけられて想定されることがあった。例えば前期中間期のはじめから現れるガジナソ文化の土器群はモチェ文化、シカン文化と平行して存続したとされる。長期間にわたって特定の土器様式が存続するという同様のパターンは海岸カハマルカにも認められ、ワリ帝国の時期に現れ、その後のシカン国家の下でも存続したと考えられる。大きな違いは、それぞれの土器の製作開始時において、ガジナソ様式土器が個別の社会・文化の指標とされるのに対し、海岸カハマルカがより大きな政体の下で出現したということである。本発表では、まず海岸カハマルカはワリ帝国がペルー北部に進出したのとほぼ同じ時期に出現することを発表者の発掘データを基に示した。次にワリ帝国が後のインカ帝国と同様に多民族国家であったと考えられ、「海岸カハマルカ」が特定の人間集団の指標となる可能性を検討した。さらに「海岸カハマルカ」の事例から、アンデスにおける国家システムの特徴を考察した。

14:30 - 14:50

「ホンジュラス共和国ラス・ピラス遺跡出土のモザイク石彫復元」

平尾雅代（金沢大学大学院博士後期課程
日本学術振興会特別研究員 DC2）

南東マヤ地域で見られる特徴の一つとして、モザイク状の石造彫刻による建造物装飾が挙げられる。中心都市であるコパンでは、1985 年から始まった「コパン・モザイク石彫プロジェクト」によって、多くのモザイク石彫が復元された。その結果、建物の機能やモチーフの意味、建造物を所有している人物の職業や官職、コパンの階層など多くの示唆を与えた。

しかし、モザイク石彫研究はコパンのみを対象とし、コパン周縁の地方センターのモザイク石彫については研究の目が向けられず、図像学の視点に立ったモチーフ解釈に注力されてきたため、考古学的な根拠に基づく解釈や、復元そのものの重要性について着目する研究はされてこなかった。発掘調査報告書や論文において、簡単な出土状況図と復元図が掲載されているものもあるが、出土位置と復元位置の関係性を明示しているものはなく、参考比較する上で限界がある。

コパン周縁の地方センターでも様々なモザイク石彫の存在が確認されているが、明確な作成・使用時期は分かっていない。ただ、複合建造物の土器あるいは C14 測定による各建造シークエンスの建造時期、表現されるモチーフや、コパンと地方センターの関係の変化などから、少なくとも 8 世紀後半以降に作成され、装飾されていたのではないかと推測されている（中村 1997:171）。中でも、集中発掘が行われ復元可能な状況にある地方センターは、キリグア、リオ・アマリージョ、自身が調査に参加したラス・ピラスだけである。

1994 年から 1997 年にかけて中村誠一氏を団長としたラス・ピラス遺跡発掘調査で出土した約 800 点のモザイク石彫の内、一括出土したものを資料として使用した。コパンやキリグア出土のモザイク石彫などを参考にしながら、出土地点と復元位置の関係を明示し、実際に復元し、地方センターの復元の一指標となる資料を作成した。

14:50 - 15:10

「二度の大噴火とサン・アンドレス遺跡：2015 年の発掘調査から」

市川彰（名古屋大学高等研究院）

本発表では 2015 年に実施したエルサルバドル共和国サン・アンドレス遺跡の調査成果の概要を報告した。サン・アンドレス遺跡はエルサルバドル共和国中央部に広がるサポティタン盆地に所在する、当該地域の中心的センターである。サポティタン盆地は、イロパンゴ火山灰（後 400～535 年頃）、ロマ・カルデラ火山灰（後 650 年頃）、ボケロン火山灰（後 1000 年頃）、プラヨン火山灰（後 1658 年）が観察することができる火山噴火と人間社会の関係を明らかにしようとするうえでは恰好のフィールドでもある。1980 年代以降、ロマ・カルデラ火山の噴火によって埋没したホヤ・デ・セレン遺跡の調査研究が推進されたが、サン・アンドレス遺跡は 1940 年代、1990 年代に局所的な発掘が行われた程度で、同遺跡の変遷や地域間交流などについては断片的な復元にとどまっている。

そうしたなか 2015 年、層位確認と編年構築のための基礎データの獲得を目的としてサン・アンドレス遺跡の発掘調査を開始した。結果、イロパンゴ火山灰とボケロン火山灰という指標火山灰を軸に先古典期後期から後古典期前期にかけての良好な層位学的情報が得られた。興味深いデータとしては、

イロパンゴ火山噴火後の復興過程の理解に資するデータが挙げられる。遺跡内で最も大きい 5 号建造物の基壇付近では、イロパンゴ火山灰の直上に床面が形成されているが、一方で住居址と想定される B 号建造物では火山灰と床面の間に一層存在することが明らかとなった。予察段階ではあるが、社会内部の象徴的な建造物が噴火後の復興過程において優先的に建設されることを示しているのかもしれない。

ボケロン火山の噴火に関するデータも得られている。ボケロン火山の噴火年代である後 1000 年頃には、現在のエルサルバドル一帯にメキシコ中央高原からの新しい民族集団の移住があったと言われている。それを示す考古資料は火山灰上面から出土することから、噴火後に新たな集団が到来したことが推測される。

15:10 - 15:30

「ネサワルコヨトル像の形成に関する一考察」

井上幸孝（専修大学）

ネサワルコヨトル（Nezahualcóyotl Acolmiztli, 1402-1472）は、「アステカ王国」を形成した三都市の一つテツココの王で、メキシコで最もよく知られている先スペイン期の統治者の一人である。しばしば彼は「詩人王（rey poeta）」などと称され、文化面において秀でた君主であったいうイメージが定着している。しかし、後古典期後期の史実を見渡せば、ネサワルコヨトルには、戦争における功績や、テツココ湖における大規模土木事業の実績などがあり、現在のイメージとは異なる側面が浮かび上がる。

そこで、本発表では、征服後にアルファベットで書かれたいくつかの史料を検討し、文化王ネサワルコヨトルのイメージの源泉を探った。具体的には、編者不詳の詩歌集（『メキシコの歌』および『ヌエバ・エスパーニャの領主たちのロマンセ』）、ポマール（Juan Bautista de Pomar）の『テスココ報告書』、アルバ・イシュトリルショチトル（Fernando de Alva Ixtlilxóchitl）の複数の歴史書を取り上げて、文化面で秀でた王というイメージが形成された過程を考察した。これによって、上述の詩歌を参照しながらポマールやアルバ・イシュトリルショチトルが彼らの言説の中で宗教面や文化面を重視して記述した結果、現在流布しているネサワルコヨトル像が形成されたことが明らかになった。

こうして植民地時代前半に創出されたネサワルコヨトルのイメージが、17 世紀後半以降、どうやって現代に伝わっていったかも、今後解明すべき重要な課題である。それゆえ、本発表では、植民地中盤以降のクリオーリョの歴史書にポマールやアルバ・イシュトリルショチトルがいかなる影響を与え得たのかについても、現時点での研究の進展の見通しを報告した。

研究発表（12 月 5 日 15：45 - 16：45）

15:45 - 16:15

「アンデス形成期における神殿外部の儀礼空間に関する考察：カンパナユック・ルミ遺跡の事例から」

松本雄一（山形大学）
ジェイソン・ネスビット（テュレーン大学）
ユリ・カベロ・パロミーノ
（ペルー国立サン・マルコス大学）
エディソン・メンドーサ・マルティネス
（ペルーカトリカ教皇大学）

本発表では、ペルー中央高地南部に位置するカンパナユック・ルミ遺跡の調査によって得られた居住域における儀礼コンテクストのデータを提示し、神殿における儀礼と居住域における儀礼がどのように結びついていたかを論じた。

一般にアンデス形成期は、神殿を中心として社会が統合されていた時代であるといってよい。そのため現状では神殿に調査が集中しており、人々が実際に暮らした場所である居住域に関する知見は不十分といわざるを得ない。これまで住居考古学(Household Archaeology)的なアプローチが各地で示してきたように、居住域の調査からは生業体系や社会組織に関する重要なデータが抽出可能であるのみならず、神殿をはじめとするモニュメントで行われたものとは別種の儀礼のデータが得られることが多い。またこのような居住域における儀礼のデータからは、神殿を中心とした社会における宗教の役割を多面的に捉えることが可能となる。

このような問題意識から発表者たちは、形成期中・後期（紀元前 1000-500 年）にアンデス中央高地南部で栄えたカンパナユック・ルミ神殿の調査に際して、神殿周囲の居住域の調査を 2007 年から行ってきた。今回の発表では、特に 2013 年度の発掘

において発見された居住域における儀礼コンテクストに焦点を当てた。同シーズンの調査においては、神殿の南側に位置する居住区から、直径が 5m ほどの奇妙な円形の構造物が出土した。石壁と木が組み合わされて作られており、これまで知られていないタイプの建築である。またその内部には様々な大きさの 19 個もの竪穴が見つかっており、そのうちの 4 つから人間の頭骨が発見された。さらに、4 つのうち 2 つは意図的に破壊された土器や、金製品、神殿の模型などの豊かな副葬品を伴っていた。人間の頭部を埋納するような儀礼の痕跡であると考えられる。また、埋納されたものが見つからない穴においては何度も穴を掘り返した痕跡が確認されており、この建築内に埋納された人間の頭部が掘り返され、別の場所に移された可能性が指摘できる。

絶対年代のデータからは、このような儀礼がカンパナユック・ルミ神殿が建築される以前から行われていたことが読み取れる。円形構造物の建築は神殿が作られた後に行われ、豊かな副葬品を伴う人間の頭部の埋納は、社会組織に階層化の萌芽が見られる時期に対応している。この時期に居住域で行われた儀礼コンテクストから、金製品や神殿の模型が発見されていることは、社会の階層化が生じた時期に神殿での儀礼と居住域での儀礼が結び付けられ、そこには神殿での儀礼を担っていたエリート層が関わっていたことを示唆している。神殿の成立以前から続くローカルな儀礼伝統が、エリート層の台頭とともに神殿での儀礼に関連付けられ、人々はより一層神殿を中心としたシステムに組み込まれていったと考えられる。

16:15 - 16:45

「先古典期マヤ文明の宗教儀礼と石器製作：グアテマラのセイバル遺跡で先古典期中期に埋納された緑色石製磨製石斧と黒曜石製石器の供物を中心に」

青山和夫（茨城大学）

先古典期マヤ文明（前 1000～後 250 年）の起源と発展の過程は、まだよくわかっていない。とりわけ先古典期中期（前 1000～前 400 年）は、マヤ文明の起源と発展を解明する鍵となるが、その文化全般と主要利器であった石器に関するデータが不足している。王権や都市が出現する前の先古典期マヤ文明の宗教儀礼や石器製作をはじめとする具体的な人間の主体的な行為（行為者性＝エイジェンシー）に関して、発掘調査で得られた実証的な考古資料が少ない。

本研究発表では、上記の学問的な溝を埋めるために、グアテマラ共和国のセイバル遺跡における先古典期中期に埋納された黒曜石製石器及び公共祭祀で供物として埋納されたグアテマラ高地産の翡翠などの硬質の緑色石製磨製石斧を中心に、先古典期マヤ文明の宗教儀礼と石器製作の一端を実証的に検証した。現在のところマヤ低地最古の「E グループ」が、セイバル遺跡の比高 100m の丘陵上に「神聖な文化的景観」として先古典期中期前半のレアル-シェ期（前 1000～前 700 年）初頭に創設され、セイバルで最大の石斧を含む最多の緑色石製磨製石斧の供物が公共広場に埋納された。高倍率の金属顕微鏡を用いた分析法によって世界で初めて先古典期マヤ文明の磨製石斧の使用痕を分析した結果、大部分の磨製石斧が実用品ではなく埋納儀礼のために製作された儀式石器であり、使用済の磨製石斧は全て木の削りに使われていたことが判明した。

居住の定住性の度合いが異なる多様な集団が携わった公共祭祀および公共広場や公共祭祀建築を更新する共同作業は、社会的な結束やアイデンティティを固めてマヤ文明の形成に重要な役割を果たした。先古典期後期や古典期に王権を生み出し、公共祭祀を形作り巨大な神殿ピラミッドを建設する必要性を住民に納得させて物質化したイデオロギー（観念体系）は、地域間交換や戦争など他の要因と相互に作用して人口の集中や都市建設の大きな原動力になった。

先古典期中期後半のエスコバ-マモム期（前 700～前 350 年）のセイバルでは、支配層が住居で黒曜石製石刃を生産し、特別な黒曜石製石器や石刃の製作屑を住居に埋納した。先古典期中期の支配層は、古典期の支配層と同様に、権威を高めるために美術品や重要な実用品の黒曜石製石刃を生産し、ものづくりを政治的道具として活用したと考えられる。公共広場に埋葬された支配層男性には、13 点というメソアメリカの神聖な数の黒曜石製石刃および完形の石刃残核が副葬された。セイバルの権力者は、公共祭祀において先古典期中期前半には主に緑色石製磨製石斧を公共広場に埋納したが、先古典期中期後半には支配層の墓や生け贄墓を埋葬し、高度な製作技術が窺われる完形の石刃残核をはじめとする特別な黒曜石製石器などの新たな供物や副葬品を埋納するようになった。埋納された磨製石斧や黒

曜石製石器の数はマヤの重要な数字に対応し、東西南北に十字状に埋納してマヤの小宇宙を象徴した供物もあった。支配層が関わった緑色石製磨製石斧や黒曜石製石刃核などの交換、石斧や黒曜石製石刃の製作、使用と埋納儀礼に関する知識と実践は、権力の強化と王権の形成に一役買った。

調査速報（12 月 6 日 8：40 - 12：10）

8:40 - 9:00

「チャルチュアパ遺跡先古典期土器編年の再検討—エル・トラピチェ地区出土土器の分析から—」

深谷岬（名古屋大学大学院博士課程前期課程）
伊藤伸幸（名古屋大学大学院文学研究科）
柴田潮音（エルサルバドル文化庁考古課）

2012 年から 2014 年にかけて行われたエルサルバドル共和国チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区の発掘調査で出土した土器の分析結果について発表した。

チャルチュアパ遺跡はエルサルバドル共和国西部に位置し、先古典期から後古典期にわたる人々の活動の痕跡が確認されている遺跡である。チャルチュアパ遺跡の土器編年は、1978 年に発表され、現在でも指標編年として広く利用されている。しかし 2014 年にはマヤ南部地域を代表するカミナルフユ遺跡の編年が、大量の年代測定データと詳細な土器分析によって再考されたことにより、マヤ南部地域の各遺跡編年の再検討が求められる状況にある。そこで発表者らは、カミナルフユ遺跡同様にマヤ南部地域の代表的な先古典期遺跡のひとつであるチャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区で新たに得られた土器資料を用いて、既存の土器編年の見直しを行った。

本研究では、エル・トラピチェ地区の 3 基の土製マウンドに囲まれた広場に設定された複数のトレンチから出土した資料を分析対象とした。各トレンチとフラスコ状ピット等の遺構から出土した土器資料の検討を行った結果、同地区では従来の編年でいうトック期（紀元前 1200-900 年）からベック期（紀元後 200-400 年）の土器がみられることがわかった。ベック期（紀元後 200-400 年）の土器は火山灰層の上・下の両方で確認でき、イロパンゴ火山の噴火による土器タイプの大きな変化はなく、ベック期の年代も下る可能性がある。またイロパンゴ火山灰層直下のフラスコ状ピットから、カル期からチュル期（紀元前 650-200 年）の土器が出現している点なども考慮すると、チャルチュアパ遺跡の先古典期土器編年の年代が下る可能性があり、カミナルフユ遺跡の新編年とも対応することが考えられる。

9:00 - 9:20

「トラランカレカ遺跡 2014-2015 年調査概報」

福原弘識（埼玉大学）、
ホセ・フアン・チャベス・バレンシア
（メキシコ国立人類学歴史学大学）

メキシコ中央高原のテオティワカンは、形成期終末期（前 100 年~後 150 年）ごろに都市化し、初期国家へと変遷を遂げた。一方、形成期を通じてメキシコ中央高原に発達してきた集落の大半は、この時期までに相次いで放棄された。人口がテオティワカンやチョルーラといった大都市に集約され、その他の集落が放棄されていくこの時期の社会変動は、後 1 世紀半ばと推測されるポポカテペトル火山の噴火による自然災害が引き金になったと推測されている。形成期中期（前 1200 年～前 400 年）以降、プエブラ・トラスカラ地域において主導的な役割を果たしていたトラランカレカも、直接の被災は免れたものの、周辺地域社会の被災とその社会的混乱に連動し衰退した。テオティワカンは、衰退していったこれらの先行社会との歴史的連続性の上に成立している。中でもトラランカレカは建築様式や技術、交易網、イデオロギーといった文化要素の面でテオティワカンとの類似性を見出すことができる一方で独自性も有しており、初期国家形成のプロセスを実証的に解明するための鍵となる遺跡である。

本発表では 2014 年と本年の調査成果を中心に報告した。我々の調査では、遺跡の利用が開始された形成期中期から放棄された形成期終末期にかけての長期間の層位学データが不足していたため、複数の床面が先行研究で確認されている建築複合間の平坦部において、発掘調査を行った。各建築複合は独立し、その間の空間は床面があるだけの比較的平坦な空間と予想していたのだが、発掘でタルー・デスカンソ（斜壁と踊場）建築様式の壁を持つ建造物が検出され、テオティワカンのように建造物が複雑に重なる都市的空間が、予想より広範囲に広がっていた可能性が浮上した。また石彫の測量調査から、

遺跡の丘陵部周縁部に神像と点描のペトログリフがセットで配置されていることが分かり、テオティワカンに引き継がれるモチーフと、その異なる利用法の存在が明らかになった。

9:20 - 9:40

「ニカラグア共和国、マナグア湖畔の考古学調査」

長谷川悦夫（埼玉大学非常勤講師）

ニカラグア太平洋岸は、後 800 年頃のオト・マンゲ語族のチョロテガ、後 1350 年頃のユト・アステカ語族のニカラオの移住によってメソアメリカ化したとされる。しかし、2000 年代に行われた太平洋岸諸遺跡の発掘調査によって、この仮説に重大な疑義が投げかけられている。新しく測定された一連の放射性炭素年代測定値が従来の土器編年と矛盾しているのである。メソアメリカで古典期終末期から、後古典期にあたるこの時期のニカラグア太平洋岸の土器編年は、ニカラオとチョロテガという民族集団の移住の年代と実態を考える手がかりとなるものであり、新大陸先史学上の大きな関心を集める。

この編年の問題を解決するために、報告者はニカラグア太平洋岸で踏査を行い、サポア期からオメテペ期と想定され、かつ未攪乱の良好な堆積を探し、土器と炭素試料を得る目的で発掘調査を行った。

昨年（2014 年）、著者はティピタパ市でチラマティーヨ遺跡を発掘し、本年はマテアレ市でラ・パス遺跡の発掘を行った。これら二つの遺跡はマナグア湖畔にある。チラマティーヨ遺跡では、大量の土器片と打製石器、二次加工によるくびれをつけた漁業用の錘と考えられる土器片、魚類の遺存体など、活発な人間活動と漁業に依存した生活様式が確認された。ラ・パス遺跡には、高さ約 3.5 メートル、直径約 20 メートルの大規模なマウンドが存在し、本年 8 月から 9 月にかけて行われたトレンチ発掘で床面と土留め壁と思われる石積みを確認した。いずれも、サポア期、オメテペ期に属する土器が出土している。

発表者によって行われた調査に加えて、2010 年に行われたマナグア市内のロス・マルティネス遺跡の発掘調査の結果などを考え合わせると、サポア期からオメテペ期のマナグア湖畔の遺跡には、その出土遺物や遺構に多様性が認められる。土器編年の再構築に関わる作業は未だ始まったばかりであるが、この結果は、スペイン人到来直前にこの地に栄えた先住民社会の小地域ごとの文化的多様性を映している。

9:55 - 10:15

「GIS と天文シミュレーションソフトを利用したパレルモ遺跡の立地とランドスケープの関係分析」

佐藤吉文（京都外国語大学）

宮野元太郎（芦屋大学）

ティワナク遺跡における大規模建造物群がそうであるように、建築は、それを利用するひとびとの空間体験を意図的に操作することで、その建築をとりまく自然景観や人為的に造作された景観の中に埋め込まれたコスモロジーを身体的に経験させ、イデオロギーとして認識させる装置として機能することがある。

先スペイン期ティティカカ湖盆地においてそうした建築の代表が形成期中期（前 1000-200 年）にまで遡り、ヤヤーママ宗教伝統とよばれる物質文化群の一角をなす半地下式広場である。この文化伝統はひろくティティカカ盆地各地にみられるものの、特定の遺跡に集中して見出されることから形成期の社会的エリートのあいだで共有された文化であると見なされてきたが、その共有が単なる形態の類似性を超えて技術や知の体系にまで及んでいたのかについては、具体的検証がなされてこなかった。

本発表では、ティティカカ湖西部に位置するパレルモ遺跡における半地下式広場に関する発掘データをもとに、QGIS と Stellarium を用いて、広場と周囲の景観や天文現象との関係について分析結果を示し、それらを同時代遺跡の比較することで、ヤヤーママ宗教伝統を共有という文化的現象の背後にあるエージェンシーの性格を検討した。

分析の結果、水資源の物理的、儀礼的管理と密接にかかわるパレルモの半地下式広場（前 120－250 年頃建設）でも、こと座のベガや農事暦との関連が深いプレアデスなどの出没方向を効果的に示すように石柱やアクセスが配置されている一方で、至分日の日没方向などは広場を超えた周囲の景観のなかに、その指標を認めることができるように決定されていることが明らかになった。このように、不動産としての建築に着目すると、ヤヤーママ宗教伝統の共有が形態の類似を超えて技術や知の体系にまで及ぶ性格のものであり、その内実を知るエリート

間の関係のもとづくものとして考えることができるという見解を提示した。

10:15 - 10:35

「ペルー北部ワカ・パルティーダ遺跡第３次発掘出土の自然遺物」

芝田幸一郎（神戸市外国語大学）
ビクトル・バスケス（アルケオビオ研究所）
テレサ・ロサレス（アルケオビオ研究所）

発表者は2002年以来４シーズンにわたってペルー北部中央海岸ネペーニャ谷のセロ･ブランコ遺跡とワカ・パルティーダ遺跡で発掘を継続してきた。いずれの遺跡においても建築の更新活動が観察され、セロ・ブランコ期すなわち形成期中期（1100-800BC）には多彩色壁画やレリーフで外壁の大半が覆われた神殿が存在し､その上にネペーニャ期すなわち形成期後期前半（800-450BC）の巨石を用いた神殿が築かれた｡そしてサマンコ期すなわち形成期後期後半（450-150BC）には前述の巨石神殿は放棄されたことが判明している｡複数ある調査目的の中でも、当初から一貫しているものは、地方編年、神殿更新の様態、そしていわゆる「チャビン問題」に絡んだ地域間関係の解明である。また近年は、発掘成果に基づく形で、世界観や饗宴などの新規テーマに重心を移しつつある。

今回の報告では、2013年のワカ・パルティーダ遺跡発掘調査で出土した自然遺物を扱った｡ネペーニャ川下流域はペルー海岸部の中でも降雨が少ない地域の１つである｡そのため動植物遺存体の保存状態が良好であり、これまでにセロ・ブランコ遺跡で饗宴廃棄物遺構の研究などを可能にしてきた｡例えば､数ある発掘区の中で饗宴廃棄物中の獣骨だけが高い割合でイヌ（Canis lupus familialis）を含んでいる現象についての議論である。ワカ・パルティーダ遺跡周辺は大きな農水路などもないため､セロ･ブランコ遺跡にまして保存条件に恵まれている。本発表では､これまでの両遺跡の自然遺物分析をベースに､上記イヌ骨に関する議論を補強することになるデータなど最新の分析結果を加え､今後の研究、特に饗宴や神殿更新といったテーマにおける展望を示した。

10:35 - 10:55

「ヘケテペケ川中流域第７次調査：モスキート平原の形成期早期遺構の分布とその多様性」

鶴見英成（東京大学）
カルロス・モラーレス（ペルー文化省）

発表者は2009年よりペルー共和国ヘケテペケ川中流域南岸モスキート平原にて、形成期早期（先土器期末期、紀元前 2000-1500 年）の大規模公共建築群を調査している。2015 年は平原の 26 地点を発掘し、遺構の分布、性質、編年的・機能的関係について研究した。

5基の基壇からなる建築複合「モスキートZ」の中核､モスキートZ１基壇にて３度目の発掘を実施し、頂上部の部屋状構造 1 基を完掘した。長辺 2.25m、短辺 1.75m、高さ 1.8m の小規模な部屋で、壁面にニッチ（壁がん)、床上に炉が設けられていた。この部屋は意図的に埋められていたが、その埋土にはチリイガイの殻と石英片が多く混入していた。炉を設えた小規模な部屋は、ペルー北部海岸・山地において多くの事例が祭祀施設として論じられており、また埋没の過程にも祭祀性がうかがわれるため、モスキート Z は神殿として機能したと考えられよう。さらに平原の他の地点において建築複合「モスキートX」「モスキートY」「モスキートP」の測量と試掘を実施し、いずれも土器を伴わないこと、多量の礫を積んで築造されていること、チリイガイを多く伴うことなど、モスキート Z と特徴を多く共有するため、同じく形成期早期の神殿建築であるとの見通しを得た。

平原の北端部に、幹線水路と支線水路に囲まれて高さ50cm程度の耕作テラスが多数配置されているのを認めた。幹線水路に沿って不定形のマウンド群が連なること、支線水路に沿って長大なマウンド群が築かれていること、公共建築と目される基壇群が耕作テラスと接続することなどから、これらの遺構群の全体が比較的短期間のうちに設計・築造されたと想定される。そしてマウンドや基壇の内部から土器が出土しないことから、すべてが形成期早期に起源を持つというのが現時点での解釈である。ただし幹線水路は少なくとも流向の異なる３つの区間に区分され、部分的に作り替えの痕跡があり、また土器を伴う後代まで機能した区間もあるなど、

その履歴は複雑である。年代測定の結果を待ってより具体的な解釈を提示することとしたい。

11:10 - 11:30

「同位体分析によるラクダ科動物飼育の検証：ペルー北部高地パコパンパ遺跡の事例」

瀧上舞（山形大学）
鵜澤和宏（東亜大学）
関雄二（国立民族学博物館）
ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）
米田穣（東京大学）

アンデス地域で大型家畜として知られるラクダ科動物（リャマとアルパカ）は古期（紀元前 5000 年-3000 年）にペルー中部のフニン高原で家畜化が起こり、アンデス各地に広がった。その飼育の目的や拡散の時期や経路について多くの研究者が注目している。

ペルー北部高地は、元々野生のラクダ科動物（グアナコとビクーニャ）の自然分布外であり、形成期（紀元前 3000 年-後 1 年）に伝播してきたと推測されている。パコパンパ遺跡では PC-I 期（形成期中期：紀元前 1200-800 年）のラクダ科動物の出土は少ないが、PC-II 期（形成期後期：紀元前 800-500 年）になると出土数が増加し、ラクダ科動物の存在が顕著になる。ペルー北部高地では形成期後期にラクダ科動物の需要が高まったと推測されているが、飼育環境や利用目的には不明な点も残っている。

近年、動物骨の科学分析を行う同位体生態学的研究でラクダ科動物の飼育を明らかにする試みがアンデス各地で行われている。本研究ではパコパンパ遺跡から出土したラクダ科動物とシカの歯のエナメル質を用いてストロンチウム同位体と酸素同位体、炭素同位体の分析を行い、パコパンパ遺跡に存在したラクダ科動物の飼育環境を推定した。

分析の結果、パコパンパ遺跡で出土したラクダ科動物は、シカと似た生態環境で生育していたこと、また幼獣から成獣に育つ過程で生育地域に大きな変化はなかったことが示された。すなわち、シカの生息地域の範囲外から移入された証拠は示されなかった。さらに、形成期後期のラクダ科動物の多くが C_4 植物を摂取しており、パコパンパ遺跡の高地の立地環境を考えると、栽培化された C_4 植物（おそらくトウモロコシ）が利用されていたと推測される。これらの同位体データから、形成期後期にはパコパンパ遺跡を利用する集団によりラクダ科動物が飼育されていた可能性が示唆される。

11:30 - 11:50

「ペルー北高地パコパンパ遺跡における「ヘビ・ジャガー神官の墓」の発見」

関雄二（国立民族学博物館）
フアン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）
ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

本発表では、ペルー北高地パコパンパ遺跡において、国立民族学博物館・ペルー国立サン・マルコス大学合同調査団が本年 9 月に発見した墓（登録番号 15P-B2-Entierro 541、通称「ヘビ・ジャガー神官の墓」）について概要を報告するとともに、被葬者の社会的地位について考察した。既述の墓が発見されたのは、パコパンパ遺跡第 3 基壇に位置する北基壇上であり、編年上、第 II 期（B.C.800～B.C.500 補正後）にあたる。北基壇は、半地下式広場の北に位置し、広場の西に位置する中央基壇、南に位置する南基壇とともに、いわゆる U 字形の配置を示す建築群の一翼を担う。北基壇上には、一辺 12m の方形半地下式パティオが建設され、その東壁の外側で墓は検出され、被葬者はパティオにおける儀礼と関係した人物であることがうかがえる。

墓の切り口は直径 55cm の円形ながら、底部の径は 85cm あり、洋梨状の地下式墓である。深さは約 96cm で、これまでに発見された土壙墓の大半が深さ 30cm 前後であることを考えると、被葬者の扱いに特殊性が認められる。事実、中央基壇で 2009 年に発見された通称「パコパンパ貴婦人の墓」（09PC-C-Entierro 09-02）同様に、被葬者を安山岩の板石で覆った後、土と大型の石で封印していた。

二体の被葬者が検出されたが、性別や年齢は自然人類学的分析を待たねばならない。いずれも東西方向に横臥屈葬状態で埋葬されていたが、頭位方向は反対で、対称性が意識されていた。西に頭位を向けた一体にはヘビの胴部とネコ科動物の頭部を象った黒色鐙形土器 1 点が置かれ、東に頭位を向けた一体の頸部付近からは、金製の首飾りが出土した。首飾りは涙形のペンダントトップを中心に計 31 個の球形飾り玉よりなり、同じ北高地に位置するクントゥル・ワシ遺跡のコパ期の墓で発見された首飾りと類似する。

近年のアンデス考古学では、形成期後期に宗教的指導者が権力を掌握し始めたことが提示されており、今回発見された墓も社会的差異の確立を示唆する証拠としてとらえることができる。

11:50 - 12:10

「パコパンパ遺跡の儀礼的コンテキストから出土した動物骨資料：饗宴行為の動物考古学的復元」

「パコパンパ遺跡の儀礼的コンテキストから出土した動物骨資料：饗宴行為の動物考古学的復元」

鵜澤和宏（東亜大学）
フアン・パブロ・ビジャヌエバ
（ペルー国立サン・マルコス大学）
長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）
関雄二（国立民族学博物館）

ペルー北部高地、パコパンパ遺跡の儀礼的コンテキストから検出された動物骨について報告した。第 1 基壇中心部で検出された饗宴の痕跡と考えられるコンテキストには同定標本数（NISP）2,411 点の動物遺存体が含まれていた。このうち 794 点が科・種・属レベルで同定できた。最優占種はオジロジカ（41.2%）であり、ラクダ科（37.5%）とあわせた偶蹄類が資料の約 80%を占める。この他にテンジクネズミ属（11.6%）、ヒト（5.5%）、ワタオウサギ属（2.9%）、イヌ（1.3%）、オポッサム（0.3%）など 10 種が確認された。本資料にはコパンパ遺跡で利用された動物の大半が含まれており、遺跡周辺あるいはその交易圏から調達できる動物を集めて儀礼が行われたことが推定される。

最優占種であるオジロジカの、歯牙萌出・咬耗状態から推定される年齢構成は幼獣 11 個体、成獣 1 個体であり老獣は含まれない。なお幼獣には、誕生間もない新生獣 1 体が認められた。ラクダ科については年齢推定可能な標本が少ないが、幼獣 2 個体、成獣 1 個体が確認され、シカと同様、幼獣が利用の主体であった。

同定されたすべての分類群において解体痕が観察された。とくに偶蹄類においては、剥皮・解体・肉の切り取りにともなう切創が観察され、長管骨は破砕されて骨髄が採取されている。熱による骨表面の変成を認める標本も高頻度であり、いずれも饗宴における feasting meal として消費されたものと判断される。また骨表面にはイヌ、ネズミによる食痕が高い頻度で観察された。とくに骨端部に集中しており、関節軟骨の付着部だけが囓り取られている例もある。

こうした骨資料の特徴から、生息地の異なる動物が、饗宴にあわせて神殿に搬入されるようあらかじめ計画されていたこと、饗宴後は食べ残こした骨がしばらくのあいだ放置されていたことなどが示唆される。

13:40 - 14:10

「ペルー北海岸におけるパブリック考古学の研究」

ダニエル・ダンテ・サウセド・セガミ
（国立民族学博物館外来研究員）

本研究の目的は、南米アンデス海岸地帯における先スペイン期の遺構や遺物の保存と活用をめぐる複数のステークホルダー間の対立に注目し、それぞれが保有する文化遺産への関心や観点を析出し、対立の要因を探ると同時に、それらの間の利害関係の調整を可能にする実践的手法の模索を通じて、様々な立場で遺跡に関わる人々が望ましい関係を構築していくための展望を得ることである。

発表者が博士号を得るために本研究を行い、ペルー共和国北部海岸のランバイエッケ州フェレニャッフェ郡において 7 年間（約 13 ヶ月間）の現地調査を行い、参与観察、インタビューおよび文献渉猟にもとづき本論文に必要なデータを収集している。本地域に存在する巨大な遺跡に関わる考古学者とコミュニティーの調査活動や保存運動、遺跡周辺で暮らす農民の生業活動などを調査し、とくにそれぞれのアクターが抱える歴史観の相違とそこから生まれる社会的コンフリクトに注目しつつ、それを乗り越える共生のモデル構築を目指した。

ペルー北部海岸の遺跡の保存に関しては、様々な問題が横たわっている。スペイン人による植民地期から現在に至るまで、この地域では金銀製品や土器を中心とした盗掘が一般的に行われてきた。しかしながら近年では、都市や農地の拡大が問題をより複雑にしている。土地問題や土地利用に関するコントロールが、政府機関や地方自治体、地主を含む様々なアクター間の対立を引き起こしており、このようなコンフリクトにさらされて遺跡は破壊されている。この問題を前にして、企業や考古学者の支援を受けたペルー政府は、地元農村における生活の質を改善し、住民が遺跡を「考古遺産」として保護することに関心を抱くよう、観光事業を推進している。

この目的を達成するために、博物館展示やパンフレットの配布、講演会、NGO の開発プロジェクト、学校教育プログラムを含む様々な方法が用いられている。しかし、これら政府の主導にもかかわらず、考古学遺跡や遺物は未だ破壊され続けている。考古学者たちはこの原因を、住民が価値を理解していないことや、教育不足にあると捉えてきた。

発表者の研究では、地元住民が遺跡の価値づけや考古遺産の定義を自ら行っていないことに遺跡破壊の原因があるという仮説を提示した。現在、ペルーにおける「考古遺産」の定義は、考古学者の視点しか含んでおらず、一般市民の視点が置き去りにされている。そのため、地元住民にとっては、外部からの概念が押し付けられている状況となっており、考古学者や政府側の意図とは異なる方法で利用されるのである。この仮説を検証するために、視覚的表現、コミュニケーションメディアに見られる情報の分析と集成、参与観察、ステークホルダーの同定、ランダムなインタビューなどの調査方法を通して、この地域における遺跡の様々な利用方法を特定することができた。

14:10 - 14:40

「アンデス形成期パコパンパにおける饗宴」

中川渚（総合研究大学院大学博士課程）
フアン・パブロ・ビジャヌエバ
（ペルー国立サン・マルコス大学）
関雄二（国立民族学博物館）
ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

アンデス形成期（紀元前 2500 年から紀元前 200 年）は、土器や公共建造物が出現し、遠距離交易が活発化する時期であり、階層化が始まる社会であるとされる。アンデス北部山地に位置するパコパンパ遺跡はこの時期の祭祀センターであり、金製品を伴う墓が検出されるなど、階層化の痕跡が認められている。本発表では、2014 年にパコパンパ遺跡より検出された饗宴遺構の土器の分析成果から、饗宴について検証した。饗宴は、特別な機会に特別な食事や飲み物を分かち合う行為とされる。特に主催者が多くの人に食事や飲み物をふるまう場合、主催者とゲストとの関係が対等ではなくなることから、権力の生成や社会の階層化との関連で論じられることが多い。権力や階層化の出現期と考えられるアンデス形成期では、その発生プロセスを解明する鍵として、重要なテーマのうちの一つに位置づけられている。

2014 年の発掘調査では、第 3 基壇の広場北側に位置するパティオ内から約 800kg もの大量の土器が集中した状態で検出された。この土器集積には、半完形土器や完形土器も多く含まれている。この中から層位的により集中度の高い箇所を抽出し、5298 点、104.5kg 分の土器を分析した結果、同遺跡における他のコンテクストとはタイプ構成、器形構成が明らかに異なっていることが判明した。完形・完形土器、口縁部の割合も埋土に比べて高い。器形は主に大型壺と鉢に二極化しているほか、動物や人間の顔を模した Máscara のタイプが比較的残りの良い状態で見つかっている。大量の食事を準備する大型壺と提供用の鉢がほとんどであること、儀礼と関わるような Máscara タイプが見つかっていること、他時期の土器の混入が極端に少ないこと、半完形・完形のほか口縁部や底部など、他のコンテクストでは少ない重要な部位の出土がほとんどであり、この層に張り付いたような状態で検出されたものもあることから、この土器集積が饗宴による結果形成されたもの、特にパティオ内で行われ、そのまま廃棄されたものと考えられる。

パコパンパで発見されたこの饗宴のコンテクストは、金製品を伴う墓が造られるようになるパコパンパⅡ期のものであり、パコパンパにおける権力生成、階層化と密接に関わっていた可能性が高い。Máscara の図像やタイプ構成から、饗宴の性格はこれまでに確認されているアンデス形成期の他の遺跡のものとは異なり、パコパンパ特有の動機によるものと推測される。また、先行研究で報告されている饗宴の痕跡は、饗宴で使用したと見られる土器や道具類がその後別の場所で廃棄され、形成された遺構であるのに対し、パコパンパで検出された土器集積は、パティオ内で饗宴を行ったそのままの状態で放棄されたものと考えられる。以上から、パコパンパ内での権力の発生プロセスだけでなく、その様相を他地域と比較する上でも貴重なデータである。

14:40 - 15:10

「ペルー、パコパンパ遺跡から出土した人骨の生老病死の復元」

長岡朋人（聖マリアンナ医科大学）
森田航（北海道大学）
関雄二（国立民族学博物館）

鵜澤和宏（東亜大学）
フアン・パブロ・ビジャヌエバ
（ペルー国立サン・マルコス大学）
マウロ・オルドーニェス（ペルー国立サン・マルコス大学）
ディアナ・アレマン（ペルー国立サン・マルコス大学）
ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

パコパンパ遺跡は、ペルーの北高地、カハマルカ県チョタ郡に位置する形成期（2500～1BC）の祭祀遺跡である。本研究の目的は、2005～2014 年度のパコパンパ遺跡の発掘で出土した人骨を調査し、個々の出土人骨の鑑定結果の記載と基礎データを提示し、生物考古学的な考察を行うことである。その結果、（1）頭蓋、下顎骨、歯が残る 70 体の年齢構成は、24 体（34.3%）が 14 歳以下の未成年、46 体（65.7%）が 15 歳以上の成人であった。46 体の成人のうち、性別判定ができた 38 体の男女比は 15：23 であり、性比は女性に偏っていた。未成年のうち、24 体中 20 体が 0 歳であった。簡易生命表によると、0 歳以降の生存率は、5 歳に至るまで 23.4%が死亡、15 歳までに 28.1%が死亡した。また、0 歳時平均余命は 25.0 歳、15 歳時平均余命は 21.3 歳であった。（2）パコパンパ遺跡出土人骨の推定身長は、6 体の男性の平均が 160.2m、14 体の女性の平均が 150.0cm であった。（3）パコパンパ遺跡の永久歯には 738 点中 137 点（18.6%）に齲蝕を認め、そのうち男性は 339 点中 63 点（18.6%）、女性は 399 点中 74 点(18.5%）であり、男女間に有意差はなかった（P>0.05）。（4）成人男性 1 体、成人女性 2 体の頭蓋に前後型の人工頭蓋変形を認め、いずれも後頭部が平らにつぶれており前後に寸が詰まっていた。（5）骨折は 5 体の人骨に認め、そのうち陥没骨折は 2 体の女性と 1 体の男性に、四肢骨の骨折は 2 体の男性に認めた。また、1 体の女性に脱臼を、1 体の男性に頭部離断に伴うカットマークを認めた。これまでパコパンパ遺跡から出土した人骨からは、骨折、脱臼、殺傷痕が認められており、外傷を持つ 7 体は出土した成人骨全体の 1 割強の頻度を占める。骨折や脱臼はいずれも治癒痕を伴うもので致命傷にはならなかったが、正常な人体構造の障害によって生活に支障を伴うものであったと想像するに難くない。（6）ストレスマーカーの指標としてクリブラ・オルビタリアの頻度を算出した。その結果、右眼窩では 21 例中 3 例にクリブラ・オルビタリアを認め（14.3%）、左眼窩では 20 例中 2 例にクリブラ・オルビタリアを認めた（10.0%）。クリブラ・オルビタリアは、慢性的な鉄やビタミン B12 の欠乏を原因とする骨髄の増殖とそれに伴う骨変化である。クリブラ・オルビタリアは遺伝的にも後天的にも引き起こされるが、遺伝的な貧血は地中海地域に限定されるきわめてまれな症例であるため、本症例は栄養障害や寄生虫感染によって引き起こされたと考えられる。また、クリブラ・オルビタリアを認めた個体のうち、2 例には陥没骨折や殺傷痕を伴っていた。クリブラ・オルビタリアが暴力を受けた個体に集中していたことは、犠牲者の生前の生活には慢性的な栄養障害などがあったことを示す。これは、ストレスマーカーと外傷の関係を示す興味深い症例である。

15:30 - 16:00

「古典期マヤの都市間ネットワーク：エル・パルマール遺跡の調査成果から」

塚本憲一郎（日本学術振興会特別研究員 SPD/
青山学院大学）

本発表では、2007 年から 14 年まで実施したエル・パルマール遺跡の調査成果から、古典期（後 250 - 900 年）マヤにおける都市間ネットワークの復元を試みた。

エル・パルマール遺跡は、メキシコ合衆国カンペチェ州南東部に位置する。この地域はさまざまな政治領域が交差している。例えば、遺跡の北方にはリオ・ベック地域、南方にはティカルを代表とするペテン地域が広がっている。西方には、古典期マヤ最大の都市であるカラクムル、中規模都市では、南にリオ・アスル遺跡、南東にラ・ミルパ遺跡などが位置する。後 378 年以降、マヤの二大王朝であるカーンとティカルの覇権争いが激化するに従って、諸都市間のネットワークも複雑化したと考えられるが、今日までそれを復元するには至っていない。発表者は、政治領域の境界上に位置していた都市の中で最大の規模を誇るエル・パルマールが本格的に調査されていなかったことに、その原因があると考えた。

調査成果から、エル・パルマールは都市間ネットワークを通じて異なった地域の特徴を取り入れながら発展した都市であったと推測される。測量図から判断すると、エル・パルマールはペテン地域の特徴を有しつつも、キンタナロー州南部やベリーズ

地域の遺跡群にみられるセトルメント・パターンに類似しているのがわかる。

次に、セトルメント・パターン研究では明らかにできない都市間の政治戦略を、カラクムル、ティカル、ベカンなどの歴史的変遷と、エル・パルマールの調査成果との比較によって考察した。偏光顕微鏡を使った土器分析や PIXE（粒子線励起 X 線）による黒曜石の原産地同定の成果は、エル・パルマールの都市間ネットワークの拡大と、後 400～600 年頃のマヤ低地中央部における大きな社会変化との関連性を示唆している。

碑文の解読作業は、他の王朝とは異なり、エル・パルマールでは王族の間で異なった称号を使い分けていた事実を明らかにした。他の遺跡から出土した石造記念碑、多彩色土器、耳飾りなどに刻まれたこれらの称号は、広範囲な都市間ネットワークの証拠であると同時に、エル・パルマールの王族が王朝内での序列関係を正当化するイデオロギーを可視化しなければならなかった当時の政治的状況を想起させる。これに対して、コパン王朝と同盟を試みるカーン王朝のヘゲモニーに主体的に関わったラカム役人は、彼らのイデオロギーを碑文階段の建設によって誇示した。

これらの成果から、エル・パルマール王朝のネットワークは、カンペチェ州南部地域内だけではなく、ウスマシンタ地域、キンタナロー州南部地域、ペテン地域、ホンデュラスのコパン地域などの広範囲におよんでいたと推測される。しかしそれは、エル・パルマール王朝の発展という単純なものではなく、王朝内の異なった集団によるイデオロギーの緊張と対立を含んだものであったと結論づけた。

第 20 回総会報告

古代アメリカ学会　2015 年度総会議事録

日時：2015 年 12 月 5 日（土）　17:00－18:20
場所：東京大学 理学部 2 号館 4 階講堂
議長：井口欣也（埼玉大学）
書記：中川渚（総合研究大学院大学）

定足数の確認

坂井正人代表幹事により、総会出席者 41 名、委任状提出者 60 名、合計 101 名であり、総会成立定足数である全会員数（156 名）の二分の一を満たしていることが報告され、総会の成立が確認された。

議長ならびに議事録署名人の選出

議長として井口欣也会員、議事録署名人として芝田幸一郎会員と井上幸孝会員が選出された。

審議事項

１．2014 年度決算ならびに監査報告〔資料 1〕

土井正樹担当運営委員から、すでに本年 1 月に会員に対して郵送により報告された 2014 年度収支決算について〔資料 1〕のとおり示され、伊藤伸幸監査委員による監査報告とともに承認された。

２．2015 年度事業報告

（1）学会誌編集（会誌担当運営委員：大平秀一）

会誌『古代アメリカ』第 18 号が 2015 年 12 月に発行したことが報告された。会誌 18 号には論文 2 本、調査研究速報 6 本が掲載され、調査研究速報のうち 4 本で特集記事を組んだことが報告された。また編集日程の改善と、より質の高い紙面づくりのために、投稿手続きと投稿締切日が変更されることが報告された。それに伴い執筆細目が改定される予定である。新しい執筆細目は、内容が決まり次第、学会ウェブサイト、メール、郵送などの手段を用いて会員に周知される予定であることが報告された。

（2）会報編集（会報担当運営委員：福原弘識）

2015 年 1 月に会報第 37 号、7 月に第 38 号を発行したことが報告された。

（3）研究事業（研究担当運営委員：渡部森哉）

下記の研究事業について報告がなされた。

①2015 年 12 月 5 日、6 日に第 20 回研究大会を東京大学で開催した。
②第 5 回東日本部会研究懇談会を 2015 年 6 月 13 日に、第 4 回西日本部会研究懇談会を 2015 年 6 月 27 日に企画、実施した。
③9 件の各種フォーラム、シンポジウムに協力事業、後援事業として参画した。
④2015 年 11 月に「高校教育検討ワーキンググループ」を立ち上げ 2016 年度に実施する内容の原案を作成した。
⑤古代アメリカ関係の研究者が在籍する「各大学の情報」を収集し、ウェブサイトに掲載した。
⑥海外で学位を取得した会員に「外国で古代アメリ

カについて学ぶ」というエッセーを執筆依頼し、それをウェブサイトに掲載した。

（4）ウェブサイト・広報事業（広報担当運営委員：鶴見英成）

ウェブサイトの維持管理および最新情報の更新、サーバーとの契約更新、アクセスカウンターのデータ集計を行ったことが報告された。またウェブサイトの充実をはかり、特集「古代アメリカを大学で学ぶには」を設置したことが報告された。

（5）名簿作成（事務幹事：松本雄一）

2015 年度に実施された名簿作成について報告がなされた。

以上のとおり、2015 年度事業報告は承認された。

３．2015 年度決算概報〔資料 2〕

土井正樹会計担当運営委員により、〔資料 2〕のとおり 2015 年度決算概報（2015 年 12 月 4 日時点の確定収入・支出と残余期間の収入・支出見込み）が報告され、承認された。

４．2016 年度事業計画案ならびに予算案

（1）学会誌編集（会誌担当運営委員：大平秀一）

会誌『古代アメリカ』第 19 号の編集と発行（2016 年 12 月を予定）が提案された。

（2）会報編集（会報担当運営委員：福原弘識）

2016 年 1 月に会報第 39 号、同年 6 月頃に会報第 40 号を発行することが提案された。

（3）研究事業（研究担当運営委員：渡部森哉）

下記のとおり提案がなされた。

①第 21 回研究大会を開催する。

②会員の研究発表、研究交流、情報交換等を充実させることを目的として、研究懇談会（東日本部会、西日本部会）の企画と実施をおこなう。

③各種フォーラム、シンポジウムなどに協力事業あるいは後援事業として参画する。

④2015 年に作成した「高校教育検討ワーキンググループ」の企画案を実施する。

（4）ウェブサイト・広報事業（広報担当運営委員：鶴見英成）

学会ウェブサイトの維持管理、掲載情報の随時更新、アクセスカウンターデータの整理を継続し、ウェブサイトの充実と学会広報に活かすことが提案された。また、ウェブサイト内の一部コンテンツを英語もしくはスペイン語で公開することが提案された。

（5）名簿作成（事務幹事：松本雄一）

役員選挙に伴い、会員情報フォームを 1 月に送付し、2 月に会員名簿を作成することが提案された。また会員情報は通年更新する一方で、名簿の作成は役員選挙に合わせて 2 年に 1 度とする変更が提案された。

（6）東西懇談会に関して（代表幹事：坂井正人）

東西両懇談会に加えて、修士論文発表会を懇談会の別枠として設けることが提案された。

以上の 2016 年度事業計画について承認された。

（7）2016 年度予算案〔資料 3〕（会計担当運営委員：土井正樹）

土井正樹会計担当運営委員より、〔資料 3〕のとおり予算案が示された。引き続き、坂井正人代表幹事より補足説明がなされたのち、案の通り承認された。

５．会則改定について（代表幹事：坂井正人）

①除名会員の再入会希望があり、これに関する事項を役員会の申し合わせ事項に追加したことに伴い、会則第 11 条を以下の通り改定することが提案され、全会一致で承認された。

（現）

第 11 条（除名）

会員が次の各号に該当する場合、総会の議決をもって、これを除名することができる

（一）　会費を連続して 2 年間、無届けで滞納した場合。

（二）　本会の名誉を著しく傷つけた場合。

（改定案）

<u>役員会は、会員が次の号に</u>該当する場合、<u>議決をもって</u>これを除名することができる。

（一）　会費を連続して 2 年間、無届けで滞納した場合。

（二）　本会の名誉を著しく傷つけた場合。

・改定の日付は２０１５年１２月５日とする。

②事務局の作業煩雑化に伴い、以下の通り運営委員の定員を変更（増加）する会則第 12 条の改定案が出され、全会一致で承認された。

（現）

第 12 条（役員）

本会は、次の役員をおくものとする。役員は役員会

を構成する。
（一）　会長　1名
（二）　代表幹事　1名
（三）　事務幹事　1名
（四）　運営委員　8名以内
（五）　監査委員　2名
（改定案）
第12条（役員）
本会は、次の役員をおくものとする。役員は役員会を構成する。
（一）　会長　1名
（二）　代表幹事　1名
（三）　事務幹事　1名
（四）　運営委員　10名以内
（五）　監査委員　2名

・改定の日付は２０１５年１２月５日とする。

報告事項

１．会員状況報告（事務幹事：松本雄一）

2016年12月4日現在の会員総数は156名（うち31名が学生会員）、新入会員7名、退会者4名であることが報告された。

２．第21回（2016年）研究大会開催日と会場について（代表幹事：坂井正人）

第21回研究大会が、2016年12月3日（土）・4日（日）、茨城大学で開催されることが報告された。

３．第21回（2016年）研究大会実行委員会について（代表幹事：坂井正人）

第21回研究大会の実行委員会について、委員長を青山和夫会員、委員を第10期研究運営担当委員の渡部森哉会員と第10期代表幹事の坂井正人会員として組織され、委員長の判断により他の委員が加わる場合があることが報告された。

４．研究懇談会運営委員会について（代表幹事：坂井正人）

2016年度研究懇談会東日本部会幹事を福原弘識会員、西日本部会幹事を村野正景会員が担当することが報告された。

５．代表幹事の在外研究について（代表幹事：坂井正人）

第10期代表幹事の坂井正人会員が、4月以降在外研究となり日本を不在にするが、今後も電話・メール等を用いて学会の仕事を継続していくことが報告された。

６．会誌の抜き刷りについて（代表幹事：坂井正人）

会誌の投稿論文に関して、これまで無償で配布していた紙媒体の抜き刷りは、2014年度より開始したPDFの抜き刷り配布に伴って終了することが報告された。また、有償での配布に関しては、今後も対応していくとの補足説明があった。

７．研究大会発表証明書について（代表幹事：坂井正人）

今大会以降、会員から申請があった場合に、研究大会の発表証明書の発行について対応することが報告された。フォーマットなどについては、検討の上、決定次第メールなどの媒体を通じて会員に報告するとの説明があった。

【連絡事項】

１．2016年度会費納入について（事務幹事：松本雄一）

2016年1月に振込み用紙を郵送する予定であるとの連絡があった。

以上、すべての審議・報告が終了したのち、関雄二会長より挨拶があり、議長の井口欣也会員によって閉会の辞が述べられ、拍手をもって総会を終了した。

資料１

古代アメリカ学会　2014年度 決算報告(2014.1.1～2014.12.31)

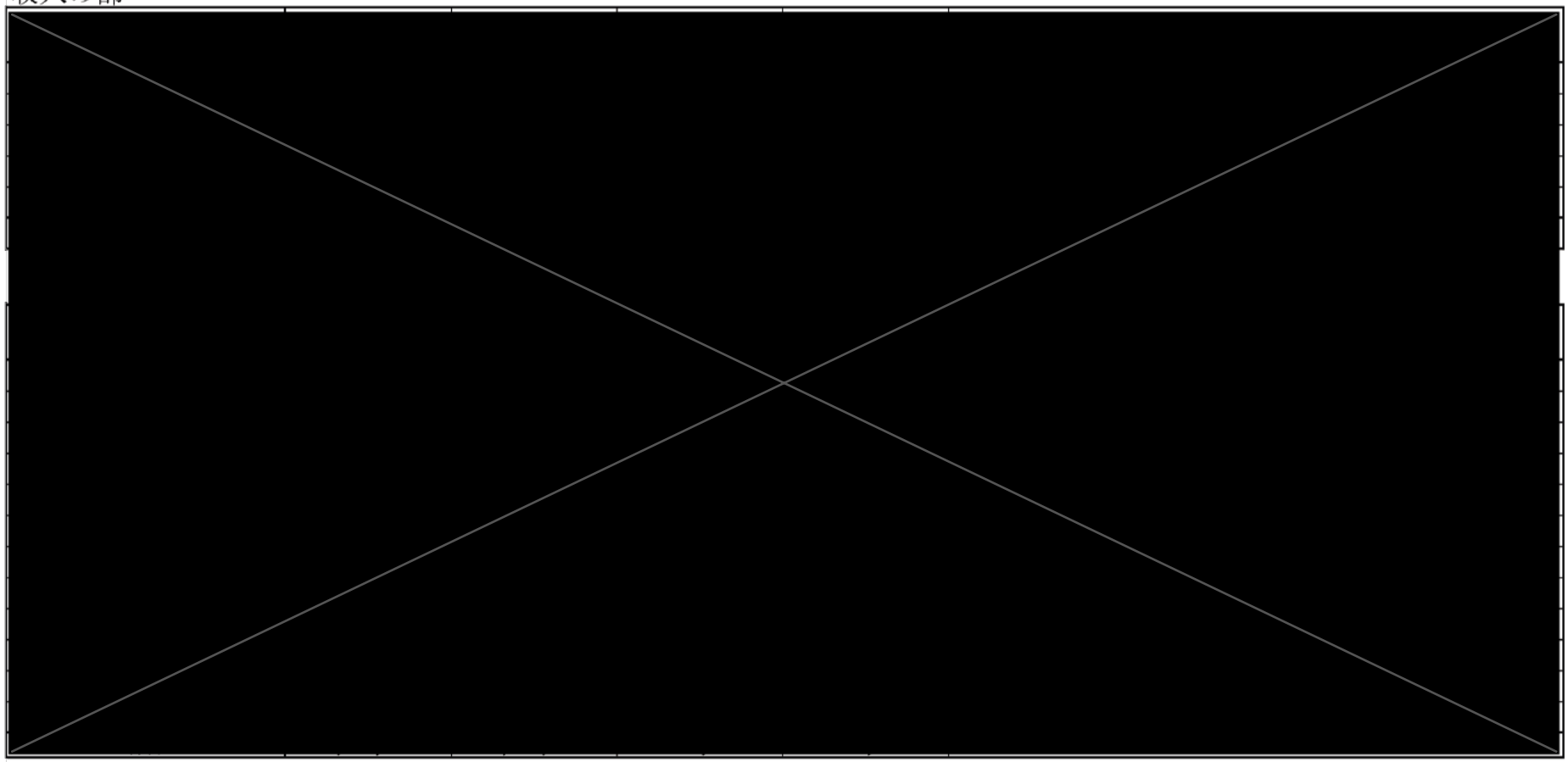
収入の部

[redacted]

資料２

古代アメリカ学会　2015年度決算概報（12月4日現在）

収入の部



*1　会場費¥40,000、アルバイト代¥39,900、ポスター・チラシ印刷¥79,920、研究大会用荷物返送費 ¥3000

*2　会誌発送　¥17,000＋議事録送料　¥500

*3　会誌18号（2015年12月発行）印刷製本費

*4　総会資料コピー代

*5　会誌発送作業補助

資料３

・　古代アメリカ学会　2016年度(2016.1.1～2016.12.31)予算(案)

収入の部

[redacted]

会員の受賞

渡部森哉会員が、第 12 回（平成 27 年度）日本学術振興会賞を受賞されました。古代アンデスの複雑社会の構造に関する画期的な理論モデルの提示と、アンデス考古学の発展に対する貢献が授賞理由とされております。今回の受賞は本会にとっても大変喜ばしいことです。誠におめでとうございます。

事務局からのお知らせ

1. 研究懇談会の開催について

2016 年も学会主催の「研究懇談会」（東日本部会、西日本部会）を開催いたします。会員の研究発表と交流の場をあらたに設け、学会としての研究活動をさらに広く展開していくことが目的です。企画、日程等について決定しましたら、メールや学会ウェブサイトでご連絡いたしますので、どうかふるってご参加下さい。

2. 第 21 回研究大会・総会の開催について

昨年の総会でもお知らせしましたように、古代アメリカ学会第 21 回研究大会・総会を 2016 年 12 月 3 日（土）、4 日（日）に茨城大学（茨城県水戸市）において開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

3. 原稿募集

①会誌『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第 19 号（2016 年 12 月発行予定）に掲載する、「論文」・「調査研究速報」・「書評」の原稿を募集しています。「調査研究速報」では、発掘などのフィールドワークの成果・報告はもちろんのこと、文献調査の報告やラボラトリーでの分析結果報告などの投稿もお待ちしております。投稿希望者は、2015 年 12 月改定版の寄稿規定および執筆細目（ウェブサイト掲載、会報 39 号と共に全会員に郵送）をよくお読みの上、ご投稿ください。

次号より、投稿に際して、「投稿エントリーカード」の提出が必要となります（2016 年 3 月 31 日提出締め切り）。「投稿エントリーカード」は、ウェブサイトよりダウンロードしてください。カテゴリーにかかわらず、原稿の提出締め切り日は、2016 年 5 月 20 日です。「論文」と「調査研究速報」の掲載の可否は、規定による査読（原稿受領後 1～2 か月で終了予定）の結果を踏まえ、編集委員会で決定します。

お問い合わせ先：
大平秀一（運営委員、会誌編集担当）
〒259-1292　神奈川県平塚市北金目 4－1－1
東海大学文学部アメリカ文明学科[redacted]
Tel. [redacted]　Fax. [redacted]
E-mail　aant.edit@gmail.com

②会報「40 号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、特に若い会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力お願いいたします。

◎内容

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。会誌『古代アメリカ』には投稿しないような**簡易の情報も可**。

○新刊紹介
　古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。
○その他
　会員にとって有益な学術情報。

◎形式
○原稿字数は、写真・図版を含めて 4000 字（会報 2 ページ分）以内とします。
○原稿はワードファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。
◎掲載
○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をする場合があります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。
○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

◎投稿先・締切
○運営委員（会報）福原弘識宛に、添付ファイルの形でメールにて送信してください。
　送付先アドレス [redacted]
　　（会誌とは異なるのでご注意ください）
○投稿締切　5 月 15 日（金）
○発行予定　6 月下旬

4. 会費納入のお願い

会費に関しては、同封の振込用紙を使用してお振込みいただくか、または以下の口座に直接お振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお 2 年度分以上、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。

ゆうちょ銀行　　口座番号：00180-1-358812
　　加入者名：古代アメリカ学会
みずほ銀行山形支店
　　口座番号：1211948(普)
　　口座名義：古代アメリカ学会

5. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを 1 冊 2,000 円（会員価格）で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ学会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第 3 号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

（事務局からのお願い）

現在、古代アメリカ学会では、学会とかかわる諸情報の連絡、および周知にメールを多用しております。まだ学会にメールアドレスを登録されていない方や、学会からメール連絡が届いていないという方がおられましたら、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご協力をお願いいたします。すでにご登録いただいている方も、メールが返送されてくる場合がございますので、当学会事務局のアドレスからのメールが受信可能となるよう、設定をお願いします。特に Gmail などのフリーメールをご利用の方は、事務局からのメールが迷惑メールとして処理されないよう、学会事務局アドレスを登録するか、迷惑メール対象から解除する手続きを行ってください。

＜編集後記＞

おかげさまで今号も、会員の皆様の積極的なご寄稿により、充実した内容に仕上げることができました。寄稿者の皆様にこの場を借りて感謝いたします。

次号も多くの会員に募る形で、大型の特集を予定しております。区切りの 40 号にもあたりますので、積極的なご投稿をお待ちしております。（福原）

昨年度は学会 20 周年の節目にあたり、研究大会も盛況で報告記事も充実したものとなりました。特集記事をご執筆くださったお二人にも感謝申し上げます。今年度も充実した紙面づくりに取り組んで参りますので、どうぞよろしくお願い致します。（中川）

発　行　古代アメリカ学会
発行日　2016 年 1 月 30 日
編　集　古代アメリカ学会　会報担当：福原 弘識
　　中川 渚
古代アメリカ学会事務局
〒990－8560
山形県山形市小白川町 1-4-12
山形大学人文学部 [redacted]
E-mail：jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180－1－358812
ウェブサイト URL　http://jssaa.rwx.jp/